

2026年
大幅
改訂版
内容一新

アイデンティティ戦争

あなたが何者かを、誰が決めるのか

アイデンティティ戦争

あなたが何者かを、誰が決めるのか

2026 年 大幅改訂版

エイドリアン・エベンズ

Identity Wars

Copyright © 2023 Adrian Ebens

Updated from previous editions

Duracell®は Procter & Gamble Co.が所有し、米国およびその他の国で登録されています。本書における Duracell®への言及は、純粋に説明のための例としてのものであり、Duracell®ブランドおよびその親会社である Procter & Gamble による推奨や、これらとの提携を意味するものではありません。

聖書の引用は口語訳（1954 年・1955 年）によります。

発行：マラナタ・メディア

Fatheroflove.info
adrian@identitywars.org

献辞

本書を、次の人たちにささげます

父アベルに。堂々と立つこと、つねに正直であること、

始めたことをやり遂げること、

そして不正を決して見過ごさないことを教えてくれました。

母エブリンに。夢を見つづけること、創造すること、

自然を愛すること、そして惜しみなく与えることを教えてくれました。

妹カレンに。子ども時代の旅路をともに歩み、

その機知でよく私を笑わせてくれました。

目次

第 1 部　二つの王国 5
第 1 章　デュラセルの木 6
第 2 章　いのちの泉 15
第 3 章　神の御心のすぐそばに 26
第 4 章　家族としての王国 31
第 5 章　家族の危機 36
第 6 章　地上の地獄 42
第 7 章　天からの救いの綱 53
第 8 章　二つの王国を比べる 61
第 9 章　バビロンの心 67
第 2 部　一つの行き先 76
第 10 章　デュラセルの鎖を断つ 77
第 11 章　天の門が開かれる 87
第 3 部　子であることへの帰り道 94
第 12 章　デュラセルで動く人生 95
第 13 章　天への階段 100
第 14 章　同じ神々、違う名前 107
第 15 章　あなたはどう読むか 116
第 16 章　もはや僕ではなく 121
第 17 章　バビロンは倒れた 126

第１部　二つの王国

――失われたアイデンティティ

第１章　デュラセルの木

部屋の明かりは薄暗いままでした。片方の壁には何枚かのポスターが貼ってあります。人気ミュージシャンの写真と、スポーツ選手の写真。どちらも、憧れの世界をのぞく窓のような役目を、これまで何度も果たしてくれました。別の壁ぎわには机があり、教科書が数冊のっています。けれども、その机の主役は小さな、それでいて力強いステレオでした。そこは、野心と揺れ動く心と、そして何より夢に満ちた、ひとりのティーンエイジャーの部屋だったのです。

私の心の中では、大きな戦いが荒れ狂っていました。行く末を決める戦い、真実の瞬間でした。「まさか自分があんなことをするとは思わなかった」――床を見つめたまま、私はつぶやきました。自分がどういう人間なのかという思いが、根本から揺さぶられていました。あまりに激しい戦いだったので、私はポスターに目をやりました。自分がまいた種を今まさに刈り取ろうとしている、その現実から心をそらすために、それまで何度も助けになってくれたポスターです。

部屋の空気には絶望が満ちていました。私の心は、この乱れた状態を支えてくれる何かにすがろうとしていました。勉強ができること。運動ができること。人前で話せること。私がすがったのは、そうした拠りどころでした。けれどもそのときは、どれも何の力もないように見えました。吐き気を催すような雲が私の上に降りてきて、私の野心を締め出しはじめました。その雲は心の大切な場所をこじ開け、そこにあった宝を奪い、そしてさらに奥の、いちばん聖なる場所へと向かいました。希望のある場所です。

私は母に、決してこんな口のきき方はすまいと自分に誓っていた、その言い方で話していました。これが最後の一撃でした。自分は、自分がなりたいと思っていた人間ではない。そう思い知らされたのです。私は自分が好きではありませんでした。変わりたいと思っていました。けれども、それは望みのないことに思えました。

＊　　＊　　＊

うつ病。うつ病は今日、私たちの社会を苦しめている最大の呪いです。世界保健機関（WHO）はこう述べています。

> うつ病は、世界における健康障害と障がいの最大の原因である。現在、3億人以上がうつ病を抱えて生きており、2005年から2015年のあいだに18パーセント以上増加した。[1]

この問題がどれほどの規模なのか、2011年の統計から受け取ってみてください。

- 自殺者は年間100万人。40秒に1人、1日に3000人が亡くなっている。
- 自ら命を絶つ人1人につき、少なくとも20人が自殺を試みている。1日に6万人という計算になる。
- 世界全体で、自殺率はこの50年間に60パーセント上昇した。おもに先進国での増加である。

[1]http://www.who.int/mental_health/management/depression/en/

・自殺の 60 パーセントはアジアで起きている。WHO によれば、中国、インド、日本の 3 か国だけで全体の約 40 パーセントを占める。[2]

いったい何が起きているのでしょうか。何百万人もの人が、もう一日を生きるよりも死ぬほうを選ぶ。人生の何が、それほどまでに人を追いつめるのでしょうか。

フィリップ・デイは著書『マインド・ゲーム』の中で、実に多くを言い当てた指摘をしています。

> かつては、心を配る家族が病んだ親族のまわりに集まり、安心感を与え、耳を傾け、とことん話をさせたものだった。……今日では、家族という単位が壊れ、宗教は貶められ、21 世紀の慌ただしさが多くの家族を互いに引き離している。その中で精神分析が、かつて心ある親族や近所の牧師が担っていたカウンセリングの役目を、そのまま引き継いだにすぎない。これが私たちの社会に有害な影響を及ぼしてきたと、私は強く確信している。[3]

フィリップ・デイは三つの要因を挙げています。（1）家族という単位の崩壊。（2）宗教が貶められたこと。（3）21 世紀の慌ただしさによって、多くの家族が互いに引き離されたこと。この中で決定的なのは、家族という単位の崩壊です。この主題について、デビッド・ヴァン・ビーマはこう述べています。

> かつてない世代が大人になった。その何百万人もが、人生の早い時期に深い悲しみを刻みつけられている。彼らは離婚した家庭の子ど

---

[2]https://www.medicalnewstoday.com/articles/234219.php

[3]Phillip Day, Introduction — http://www.campaignfortruth.com/Eclub/100702/depressionandsuicide.htm

もたちである。そして彼らは、果てしなく続く行列の、ほんの先頭にすぎない。[4]

ジム・コンウェイは著書『法的または感情的な離婚のアダルトチルドレン』の中で、法的にであれ感情的にであれ家族の崩壊を経験した何千人もの人々が負った痛みと喪失を、生々しく描き出しています。彼が挙げる特徴の一つが、心の不安定さです。そして、「私は何者なのか」「私は愛される値打ちがあるのか」という、絶え間ない問いです。[5]

この問いこそ、人間が抱える苦しみの源そのものに突き刺さります。自分には意味があるのか、という問題です。誰か本当に私を気にかけてくれる人がいるのだろうか。私に何か値打ちはあるのだろうか。こうした問いは、どのようにして人間の心に住みついたのでしょうか。それに答えるには、いちばん初めまでさかのぼる必要があります。

エバはふと気がつくと、禁じられた木をじっと見つめていました。「どうして神は、この木から取って食べてはいけないと言われたのだろう」と彼女は思いました。その実はとても魅力的で、こちらへおいでと手招きしているようでした。そのとき突然、木のほうから声が聞こえました。

好機と見たサタンは、蛇を使ってエバを誘います。「園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が言われたのですか」[6]。サタンはエバを議論に引き込みながら、同時に、神の言葉をそのまま受け取っ

---

[4]David Van Biema, "Learning to Live with a Past that Failed," People, May 29, 1989, p 79.

[5]Jim Conway, Adult Children of Legal or Emotional Divorce, (Monarch Publications, 1990) p 53.

[6]創世記 3:1

てよいのかという疑いを、彼女の心に投げ込んでいます。議論と理屈の土俵では、エバはサタンの相手ではありません。そこに欺きと闇という、エバの知らない武器が加わります。エバが口を開いて相手になろうとした時点で、勝負は無残なほど短く終わるのです。

「わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、『これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないから』と、神は言われました」[7]。エバは神が語られた言葉を繰り返すことで、その挑戦を受けて立ちました。けれども彼女は、すでに深刻な窮地にいます。自分自身の好奇心と、サタンの最初の一撃とが重なって、次に来る一言への備えが、まったくできていなかったのです。「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」[8]。

「友好的」な議論のつもりで誰かと話していて、こちらが優勢だと感じていたのに、相手が思いもよらないところから何かを投げ込んでくる。そんな経験はないでしょうか。まったく予想していなかった一言。頭の中で滑らかに回っていた歯車が、その一言で急に止まってしまう。相手が言ったことは、別に深遠でも、目を見開かせるようなものでもありません。ただ、その人からそんな言葉が出てくるとは思ってもみなかったのです。そんなことをあれほど大胆に、あれほど露骨に口にする人がいるとは、考えたこともなかったのです。

獲物が動けなくなったのを見たサタンは、恐ろしいほどの正確さで、勝負を決める一撃を打ち込みます。「それを食べると、あなたがたの目

[7]創世記 3:2、3

[8]創世記 3:4

が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」[9]。

このわずか数節は、小さな田舎町を車で通り抜けるようなものです。まばたきをすれば、見落としてしまいます。サタンがエバに持ち込んだ考えの中には、今もアダムのすべての子孫を苦しめている呪いの種が入っていました。自分には意味があるのか、という終わりのない闘いです。

解放を約束するかのように聞こえるこの考えこそ、人間の魂を惨めさと闇の中につなぎとめている鎖の、その材料そのものなのです。大げさに聞こえるでしょうか。「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」。この言葉をこれから一つずつほどいていきますので、しばらくおつきあいください。そして、この言葉がどんな実を結び、あの二つのしつこい問いをどう生み出したのかを見ていきましょう。「誰か私を気にかけてくれる人はいるのか」「私は愛される値打ちがあるのか」。

私が八歳くらいのころのことです。妹が人形をもらいました。泣いたり笑ったり、ミルクを飲んだりする人形です。することはただ一つ、背中に電池を二本入れるだけ。それだけで人形は動き出しました。妹はその人形で何時間も遊んでいました。しばらくすると泣き声がひどく耳ざわりになってきて、私はその人形を犬に食べさせてやろうかと思いましたが、思いとどまりました。そんなことをすれば、今度は妹の泣き声を一時間聞くことになるからです。この赤ちゃん人形は、背中に電池を二本入れるだけで命を得ました。サタンがエバに伝えようとしたのは、まさにこの考えだったのです。エバよ、ほかの誰が何と言おうと、気にすることはない。あなたは自分の中に命を持っているのだから。好きなよ

[9]創世記 3:5

うにすればいい。何の害も受けはしない。自分の中に命があるのだから。あなたは決して死なない。電池を充電しにこの木へ戻ってきさえすれば、それで大丈夫なのだ、と。

生後一年半の赤ん坊が、両親にこう言うところを想像できるでしょうか。「もう自分ひとりでやっていけると思うんだ。さっき裏庭で庭の置き物の小人と話したんだけどね、僕の中には力があって、それが僕を生かして、必要なものは全部与えてくれるんだって。だから、これまで助けてくれてありがとう。まあ、そのうちまた会おうよ」。園でアダムとエバに起こったのは、まさにこれでした。「あなたがたは決して死ぬことはない」というこの考えが、天の父に全面的に依存しているという二人の感覚を、粉々にしてしまったのです。それは、二人が一個の人格として何者であるのか、その土台そのものを攻撃しました。二人のアイデンティティの感覚を混乱させ、その結果として、神の子としての二人の価値をも混乱させたのです。

では、なぜアダムとエバは、自分の過ちに気づいて、天の父に全面的に依存する場所へ戻ることができなかったのでしょうか。そう単純であればよかったのですが、そうはいきませんでした。自分の中に力があるから決して死ぬことはない。たとえ一瞬であってもこの考えを受け入れれば、その瞬間から、神と親しく交わっていたあの元の幸いな状態へ戻る道は閉ざされてしまうのです。この問題については後でもっと詳しく話します。まずは、あの運命の木に戻りましょう。

サタンの言い分に注目してください。この実を食べれば、二人の目は今より高い次元へ開かれる、というのです。ここには二つの意味が含まれています。あなたの中に力がある、というだけではありません。この物質の世界には力ある物が存在していて、それを手に入れれば、あなたはもっと力を持てる、というのです。物質世界へようこそ。

創世記 3:4、5 で、サタンは自分の新しい理想の王国へ改宗者を得ようと、本格的な伝道の姿勢に入っています。彼が差し出したのは、受け入れる者すべてに力と満足を約束する王国です。この王国は、二つの中心的な原則の上に成り立っています。

1. あなたは自分の中に命を持っている。だから、外にいるいかなる恵みの与え主にも、いかなる権威にも、まったく頼らなくてよい。
2. 私たちのまわりには人や物や事柄があり、それを手に入れたり、それと結びついたりすれば、私たちはもっと力を持ち、もっと目が開かれ、もっと満たされた人生を送れる。

この知識の木を通して、サタンが差し出していたのは、電池で動く生き方でした。外にいる恵みの与え主も権威も必要としない生き方です。この章の題を「デュラセルの木」としたのは、そのためです。私たちがサタンの人生哲学に従うなら、私たちの体の細胞（セル）はいつまでも長持ち（デュラブル）する。サタンはそう言うことでしょう。[10]

ここで覚えておくことが大切です。アダムとエバがその木の実を食べたとき、実そのものに、二人を恐れさせ、罪深くし、反抗的にするような毒が入っていたわけではありません。聖書は、その木が「食べるに良く」[11]見えたと語っています。毒は、サタンがエバに語った言葉でした。毒とは、サタンの王国の原則なのです。

こう問う人がいます。「実を食べたのはアダムとエバなのに、どうして私が苦しまなければならないのか。私はあの木から食べていない」。けれども実際のところ、私たちが神から独立して行動するたびに、私た

---

[10]訳注：「デュラセル（Duracell）」は、durable（長持ちする）と cell（電池・細胞）を合わせた商品名です。

[11]創世記 3:6

ちはアダムとエバとまったく同じようにあの木から食べているのです。サタンの王国の毒を飲み込んでいるからです。それどころか、私たちは毎日この木から食べており、その結果ひどい消化不良に苦しんでいる。このことを、これから学んでいきます。

神から離れて生きられるという考えは、多くの人にとって、それほど奇妙には思えないかもしれません。けれども次の章では、こういう考え方が実は自殺行為なのだということを学びます。

第 2 章　いのちの泉

仕事で長い一日でした。予算づくりの最終段階に入っていて、実際には 90 件近い予算を一つにまとめなければなりませんでした。限られた収入を、野心的な部門長たちのあいだで切り分けていく。神経を使う作業です。それぞれが目標を達成するために、より大きな一切れを望み、期待し、ときには要求してきます。頭からその数字を追い払おうと必死になっていたところへ、突然電話が鳴りました。

「もしもし……父さんだよ」。肩に途方もない重荷を背負ったような声でした。「どうしたの」。「母さんが大きな交通事故に遭った」。その言葉に、頭を殴られたような衝撃を受けました。体が震えはじめ、心拍数は一瞬で文字どおり倍になりました。アドレナリンが一気に体を駆けめぐり、筋肉がこわばります。「事故……」。受話器を持つ手を落ち着かせようとしながら、私はほとんどささやくように言いました。「どれくらいひどいの」。「かなりひどい」。

その瞬間、電話の向こうへ飛び込んで、ただ父にしがみつきたいと思いました。けれども父は車で 12 時間かかる場所にいて、私は飛行機に乗るために朝を待つしかありませんでした。受話器を置くと、頭の中がぐるぐる回りはじめました。衝撃と、恐れと、しびれとが、いっぺんに襲ってきます。そのときイエスのことを思い出し、私はその場にひざまずいて叫びました。「イエス様、どうか母を死なせないでください」。聖書を開き、ただ祈って、祈って、やがて静けさが降りてきて、平安に近いものを感じました。それから心はまた日常のこまごまとしたことへさまよい、そしてまた襲ってくるのです。恐れと、無力感と、衝撃が。私は何度もひざまずき、ただ祈り、イエスにしがみつきました。

母は音楽のレッスンに向かう途中でした。片側二車線の道路で、上下線のあいだには 10 メートルの緑地帯があります。ちょうど別の車を追い越して丘の頂を越えたところまでが、母の記憶のすべてです。対向車の一台が制御を失い、10 メートルの緑地帯を越えて、母の車に正面から衝突しました。衝撃でエンジンは隔壁を突き破って押し込まれ、同時にハンドルが母の顔にまっすぐ突き刺さりました。どういうわけか、そのとき座席が壊れました。それがなければ母は即死していたはずで、私はそのことを本当にありがたく思っています。病院に運び込まれたとき、母は両腕と両脚を骨折し、顔の左半分が砕けていました。

母が運び込まれたとき、ちょうど勤務を終えようとしていた医師がいました。母を見るなり、彼はすぐに処置にかかりました。8 時間、母の命のために闘い、張りつめた時間の末に、ようやく母の容体は安定しました。あの医師への感謝を言い表す言葉が、私には見つかりません。今でも思い出すと涙が出ます。その人は 16 時間続けて働き、そのうえ午前 3 時に父へ電話をかけ、母は危険な状態だが安定していると知らせてくれました。今も深く感謝しています。医療という仕事の技術と、強さと、優しさとが、あの人に輝いていました。

数日後、私と妻は集中治療室で母のそばにいました。生きている母を見られただけで、私はただうれしかったのです。医師たちは回復の早さに驚いていました。母はもうピアノを弾けないだろう、歩くことさえできないかもしれない、と言われました。つらい知らせでしたが、それでも母は生きていました。私は感謝していました。妻のロレルが母の診療記録を見ていて、私を手招きしました。そこには、医師たちが母を失うと考えた時点がはっきり記されていました。ところがその直後、母のあらゆる生命徴候が急に持ち直し、容体が安定したのです。なぜそうなったのか、記録には説明がありません。けれども私は知っていました。い

のちの源である私の父が、母を支えるために御子を遣わしてくださったのです。イエスのいのちを与える力に、私は心から感謝しています。今、母は歩いています。ときどき母がピアノを弾くのを聞くと、確実な死から母を救ってくださったイエスへの、深い感謝がこみあげてきます。

いのちの源は何かという問いについて、聖書は少しの疑いも残しません。コロサイ人への手紙には、イエスについてこう記されています。

> 万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。(17) 彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている。
>
> コロサイ人への手紙 1:16、17

私たちが見ることのできるもの、感じ取れるもの、そして見ることのできないものまで、そのすべてがイエス・キリストによって造られ、今もキリストによって保たれています。[12]最後の一文の言い方に注意してください。「万物は彼にあって成り立っている」。神の御子から流れ出るいのちの力が、全宇宙をつなぎとめている。聖句はそうはっきり告げています。パウロは使徒行伝で、これを別の言い方で語っています。

> この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。(25) また、何か不足でもしておるかのように、人の手によって仕えられる必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、(26) また、

[12]歴代志上 29:14「すべての物はあなたから出ています。わたしたちはあなたからいただいたものを、あなたにささげたにすぎません」

ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。(27) こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。(28) われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。

使徒行伝 17:24-28

ここに見えるのは、私たちの人生に深く関わってくださる神です。パウロは大きな絵から語りはじめ、そこから個人的で親密なところへと降りてきます。

1. 神は、あらゆる民族の時代と場所とを定められた。
2. 神は、私たち一人ひとりから遠く離れてはおられない。
3. そして最後にパウロは核心へ進み、私たちは神のうちに生き、動き、存在していると言う。

神のうちに生きているのなら、神なしには生きられない。単純な理屈です。神を代表する方として、神の御子イエスはこう言われました。「わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」[13]。どうか、この言葉をそのまま受け取ってください。私たちは肉体的にも、精神的にも、霊的にも、御子なしには何一つできないのです。赤ん坊が親に頼りきっているのとまったく同じように、私たちはすべてを神と御子に頼りきっています。

この点は影響がとても広いので、一つ例を挙げましょう。心臓という驚くべき器官を考えてみてください。心臓は、何十年ものあいだ一度も

[13]ヨハネによる福音書 15:5

休まずに、体じゅうへ血液を送り出すポンプとして働きつづけます。驚くべきなのは、その鼓動が、自分の外にある何かに助けられているようには見えないことです。心臓の筋肉は、神経系からの直接の刺激がなくても、収縮し、弛緩することができます。いわゆる内在性の調節機構を持っているのです。ある解剖学の教科書はこう説明します。「刺激伝導系は、心筋線維を収縮させる電気的な信号を生み出し、これを分配する特殊な筋組織から成る」[14]。この筋線維がたしかに特殊なのは、神経系から来るのではない電気信号を、自ら生み出しているからです。ところが驚いたことに、その教科書のどこにも、この心筋線維がどうやってその電気を生み出しているのかは書かれていません。「特殊」で「内在的」だとは言う。けれども、どうやってそれを行うのか。そのエネルギーはどこから来るのか。

ここで道が二つに分かれます。聖書は、このエネルギーは神から直接来ると言います。「われわれは神のうちに生き」（使徒行伝 17:28）。サタンは、それは私たちの内側にもともと備わっている、自分のものである生物学的な仕組みの一部にすぎない、と言います。「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」（創世記 3:4）。これは根本的な問題です。どちらか一方であって、その中間はありません。この問題で中間の道を取ろうとするクリスチャンは大勢います。「はい、神がすべてをお造りになりました。けれどもそれはぜんまい時計のようなもので、神は動かしはじめて、あとは走らせておられるのです」。まるで神がデュラセルの電池を作って、私たちの中に入れておかれたかのような言い方です。聖書はそんなことを教えていません。私たちは神と親密に結ばれており、一日のどの一時間も、どの一分も、どの一秒も、そのまた千分

[14]Gerard Tortora and Nicholas Anagnostakos, Principles of Anatomy and Physiology, (Harper and Row Publishers, New York, 1984) p 463.

の一秒も、神に頼りきっています。神は今この瞬間も、意識をもって、愛をもって、私たちの心臓を打たせる電気を送りつづけておられます。この事実には、人間としてどうにも落ち着かない気持ちにさせられるものがあります。それについては後で扱いましょう。今はっきりさせておきたいのは、これだけです。「われわれは神のうちに生き、動き、存在している」を信じるのか、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」を信じるのか。中間地帯はありません。

ここまででも受け入れがたいかもしれませんが、私たちはまだ人間の存在の肉体的な面しか扱っていません。次は精神的な面と霊的な面です。次の聖句を見てください。

> それは彼らが、心を励まされ、愛によって結び合わされ、豊かな理解力を十分に与えられ、神の奥義なるキリストを知るに至るためである。(3) キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている。
>
> コロサイ人への手紙 2:2、3

> 主はモーセに言われた、(2)「見よ、わたしはユダの部族に属するホルの子なるウリの子ベザレルを名ざして召し、(3) これに神の霊を満たして、知恵と悟りと知識と諸種の工作に長ぜしめ、(4) 工夫を凝らして金、銀、青銅の細工をさせ、(5) また宝石を切りはめ、木を彫刻するなど、諸種の工作をさせるであろう」。
>
> 出エジプト記 31:1-5

聖書は、神をあらゆる知恵と知識の源として示しています。コロサイ人への手紙 2:2、3 は、人間が自分で知恵や知識を生み出せるという考えに、正面から異を唱えます。すべての知恵、すべての知識は、御子キリストを通して神から来るのです。その一例が出エジプト記 31:1-5 です。

ここで神は、一人の人に工芸の知恵と理解とを与えておられます。すぐれた才能を示す人のことを、私たちはよく「賜物を持っている」と言います。まさにそのとおりです。神から賜ったものなのです。

コンサートの真ん中へ行ってみましょう。舞台には堂々たるグランドピアノ。才能ある若い女性が鍵盤の上に指を走らせ、聴衆は息をのんで聞き入っています。彼女はピアノを文字どおり歌わせています。名手の手が触れているのです。やがて曲は高まり、終わりが近いことが伝わってきます。もっと聞いていたい。けれども曲は終わり、会場は拍手に包まれます。優雅さと気品、そこに情熱と激しさが重なった演奏に、誰もが心を打たれています。若い女性は一礼し、称賛の香りを吸い込んで、舞台を去っていきました。

少し戻ってみましょう。この見なれた光景には、考えてみると不思議なところがあります。こういうことが起こるたびに、聴衆は本来「もろもろの恵みの源なる神をたたえよ」とでも歌い出すべきなのです。拍手は、その技術と知恵と能力とを与えてくださった神に向けられるべきものです。ピアニストの心は、使うようにと神が与えてくださった賜物への愛と感謝であふれるはずです。けれども、実際にはめったにそうなりません。もし本当にそのように受け止められるなら、私たちは成功しても舞い上がらず、失敗しても落ち込まないでしょう。何かを成し遂げる力は、私たちから出たものではないからです。私たちから出たものでないなら、成功しても自分の手柄にはできず、失敗しても落ち込む理由がないのです。

ここにデュラセルの木の呪いがひそんでいます。モーター付きパラグライダーで大空へ舞い上がる自由を思い浮かべてください。[15]何かを成し遂げたとき、それを自分の力で成し遂げたと信じて味わうあの解放感は、地上はるか数千フィートまで登り、そこから見わたす絶景の高揚感に似ています。けれども登りすぎれば、酸素が足りずに意識を失うか、エンジンが止まるかして、地面へまっさかさまです。「自分の中に力がある」という嘘の中を高く登れば登るほど、地面に叩きつけられるときの速度も速くなります。デュラセルの木の呪いから逃れる道はありません。ひとたびその実を味わえば、登りたいという欲求は抑えがたく、行きつく先は避けられないのです。「うつ病は、世界における障がいの最大の原因である」[16]というのは、偶然ではありません。

デュラセルの木の実は、自分に合わない高さまで登りたいという欲求を生み出します。実を食べれば食べるほど登りたくなり、登りたくなるほど、墜落は確実になります。あなたはもう何度、地面に叩きつけられたでしょうか。あと何度、耐えられるでしょうか。考えてみる値打ちがあります。

次の段階へ進みましょう。肉体的な依存と精神的な依存を見てきました。では、霊的な依存、道徳的な依存はどうでしょうか。ここは受け入れるのが難しいところです。シートベルトを締めてください。少し揺れるかもしれません。

---

[15]動力付きパラグライダー（パラモーター、PPG）は、操縦者が背中にモーター（パラモーター）を装着し、その推力によってパラグライダーで離陸する超軽量航空の一形態です。無風でも平地でも、補助なしに操縦者一人で離陸できます。——ウィキペディア

[16]http://www.who.int/mental_health/management/depression/en/

聖書は「神は愛である」（ヨハネの第一の手紙 4:8）と告げています。つまり、神が愛の源なのです。聖書はまた、神を希望の神とも呼んでいます（ローマ人への手紙 15:13）。この考えは、ガラテヤ人への手紙で大きく広げられます。

> しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、
> (23) 柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。
>
> ガラテヤ人への手紙 5:22、23

この聖句の意味するところは、息をのむほどです。少し考えてみましょう。ここに挙げられている性質は、すべて神の霊を受けることから来ます。つまり、神の霊なしには、愛も、喜びも、平和も、忍耐も、優しさも持てないということです。ある日、湖のほとりの公園を歩きながら、私はこの聖書の真理について考えていました。静かで、穏やかな午後でした。ふと、母親が娘をブランコで押しているのが目に入りました。二人とも笑っていて、一緒にいることを心から楽しんでいるのがわかります。この母親が娘に対して味わっている愛は、神から与えられたものです。娘に優しく、親切に、穏やかに接しようというその思いは、母親の心から生まれたのではなく、神の心から出て、母親に与えられました。母親がそれを表すことを選んだので、それが母の愛になったのです。ですから厳密に言えば、それは母親の愛ではなく、母親を通して表された神の愛です。母親が神の霊に応え、それを表したからこそ、その愛は母親の一部になりました。本当の意味では、子への母の愛というものも、夫婦のあいだの愛というものも、存在しないのです。過激に聞こえるでしょうか。けれども聖書が教えているのは、このことです。

説教やセミナーでこの話を何度もしてきましたが、聴衆の反応を見るのは興味深いものです。人類の土台そのものを攻撃されたかのような顔

をする人もいます。これまでに歌われてきた何百万という愛の歌も、結婚式の祭壇で交わされてきた何十億という「あなたを愛します、永遠に愛します」という約束も、神が私たちの開かれた魂に愛を注いでくださらないかぎり、その一つとして守ることはできません。愛という性質を、あのパラグライダーに乗せてみましょう。なぜこれほど多くの人が愛から「落ちて」、地面に叩きつけられるのでしょうか。愛は自分の魂から湧いてくるものだと信じている人は、ある朝目覚めて、相手への愛を「感じない」ことがあります。この関係はもう自分に合っていないのではないかと疑いはじめ、その感覚を取り戻してくれる誰かを探しはじめる。デュラセルのクレジットカードが限度額に達し、支払いの時が来たのです。

妻を永遠に愛すると本気で誓った誠実な男性が、ある日ふと、別の女性に心を引かれている自分に気づく。そんなことも起こります。そう感じたくはないのに、「どうしようもない」。愛は情欲と取り違えられ、自分の誠実さそのものが疑わしくなります。そして彼は妻から身を引きはじめます。こんなふうに思ってしまう自分は、もう愛される値打ちなどないと感じ、その罪悪感に耐えられないからです。彼は自分の心から愛を流しつづけられると思っていました。けれどもパラグライダーは失速し、飛び立った場所へ墜落し、結婚生活は終わりました。結婚に喜びを見いだすことが、これほど多くの人にとって手の届かないものになっているのも、無理はないのではないでしょうか。

もう結婚生活に値打ちを感じられないと思っている方へ。愛は神の心からのみ生まれ、それを求める人には惜しみなく与えられます。相手への愛を失ってしまったと感じるなら、どうかその愛を返してくださいと神に願ってください。神は必ずそうしてくださいます。約束しておられるからです。

わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。(14) 何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。

ヨハネによる福音書 14:13、14

第 3 章　神の御心のすぐそばに

私たちは猛烈な勢いで高速道路を走っていました。ロレルの陣痛が規則的になってきたのです。手遅れになってはいけないと、病院へ急ぎました。何もかもが初めてで、心が躍っていました。もうすぐ最初の子どもが生まれるのです。分娩室にすべり込むと、看護師が私たちをひと目見て言いました。「あなたたち、楽しそうすぎるわね。少し歩いてらっしゃい」。おかげで浮かれた気分は少ししぼみました。45 分後に戻ってくると、ロレルはもう笑っていませんでした。それからさらに 30 分。私たちは陣痛のただ中に着地しました。ほかに言いようがありません。陣痛、それも重労働です。両親学級で習った技術を思い出そうとしましたが、集中しつづけるのは大変でした。陣痛は正面から突っ込んでくる貨物列車のようです。一つをやり過ごしたと思うと、次がもう頭の上に来ています。11 時間の末に、私たちは長男マイケルを迎えました。

出産直後のロレルと私が写った、とても面白い写真があります。彼女は座って晴れやかに笑っていて、まるで一日の仕事を終えたという顔です。そして私は風に揺れる草のようにふらふらで、今にも倒れそうな顔をしています。あの日、私は女性というものに深い敬意を抱くようになりました。男性のみなさん、妻の出産に立ち会うのは、本当に重労働です。

笑い終わったら、話を続けさせてください。愛する人があれほど苦しんでいるのを見る、その精神的な重さは相当なものです。私たち男は、たいてい問題には答えを用意したがります。けれどもこのときばかりは何の答えもなく、それがつらかった。私はただ祈りました。「神様、こ

の苦しみすべてに理由があることは知っています。けれども今の私には、それが見えません」。終わったときは、心底ほっとしました。

初めて息子を抱いたとき、それは永遠に属する一瞬でした。私は息子の目をのぞき込み、息子もまっすぐに私を見返していました。驚くべき瞬間でした。畏れと不思議さの中で見つめつづけるうちに、私は深い恐れに捉えられました。この子には私と同じ性質が刻まれている。権威に逆らい、従うよりも反抗へ自然に傾いていく性質です。その意志を導き、本当の愛と、優しさと、無私と、従順とを教える責任が、私にあることを私は知っていました。そしてこう思ったのです。すべてが終わったとき、この子は私の友でいてくれるだろうか。何かが私たちのあいだに入り込み、私たちを引き離すことがあるだろうか。私はその場で祈りました。「天におられる父よ、どうか私と息子のあいだに、何ものも入り込ませないでください。いつまでも近くにいられますように。この子が私という人間を本当に知り、私の友となってくれますように」。あの祈りの切実さは、今も私のうちに残っています。しばしばそれを感じ、神がそれを現実にしてくださると信じて、今も祈りつづけています。

それから4年後のことです。私はある安息日を、生活の喧騒から遠く離れて、主とともに歩き、語りながら静かに過ごしていました。天の父のことと、その私への愛と、それがどれほど尊いかを考えていました。すると突然、心が息子の誕生の日へと引き戻され、あのとき抱いた、決してこの子と離れたくない、この子に本当に知られたいという激しい願いを、もう一度そのまま味わったのです。その場面が過ぎ去ったあと、静けさの中で、心の奥に細く小さな声を聞きました。「わたしがあなたに対して感じているのは、それと同じなのだ」。私は笑うべきか泣くべきかわからず、そしてそれを受け入れることが、信じられないほど難しいと感じました。「けれども主よ」と私は言いました。「あなたは私が

どんな人間かご存じです。私がしてきたこと、口にしてきた間違ったことを、みなご存じではありませんか」。そうして私は抵抗しつづけました。自分でも驚きました。私はキリストを救い主として受け入れ、自分の罪は赦されていると信じている人間です。それなのに、神がこれほど近くまで来て、私をどう思っておられるかを告げてくださったとき、それを受け入れるのは難しかったのです。とうとう私はこう叫びました。「ああ、ありがとうございます。私を愛してくださって、ありがとうございます。私のためにしてくださったすべてを、ありがとうございます。私はあなたを心から愛します」。そのとき私は、本当に神の腕に抱かれているように感じました。これ以上の幸いはありませんでした。天の父は、私たちのあいだに何ものも入り込ませたくないと願うほど、私を愛しておられる。私たちが引き離されるかもしれないと考えるだけで、父は心を痛められる。そしてそれが決して起こらないように、できるかぎりのことをしておられる。私はそう悟ったのです。

この経験を通して、神の王国に属することの素晴らしい特権が、頭ではなく心のところで私に示されました。その少しあと、私は聖書のいくつかの箇所へ導かれ、目を開かれて、いっそう神をたたえるようになりました。この聖句の意味が、あなたの心に焼きつき、決して離れることがありませんように。ここに、神の王国をのぞく、とてもはっきりした窓があります。

> 五羽のすずめは二アサリオンで売られているではないか。しかも、その一羽も神のみまえで忘れられてはいない。(7) その上、あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている。恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である。
>
> ルカによる福音書 12:6、7

イエスはここで、ご自分の王国の原則を説明しておられます。この数節には、その王国で何が人を意味ある存在にするのか、その公式が示されています。何がその人を数に入れさせるのか。何がその人を値打ちあるものにするのか。何がその人を尊いものにするのか。こうした問いがあなたにとって重要でないなら、この聖句はあまり意味を持たないでしょう。けれども私はこれまで、自分の値打ちという問題と格闘していない人に、一人も出会ったことがありません。

イエスはまず、人間の物差しですずめ二羽の値段を示されます。地上の感覚では、すずめにはほとんど値打ちがありません。そこでイエスは対比を持ち出し、「その一羽も神のみまえで忘れられてはいない」と言われます。神がすずめを覚えておられるがゆえに、神の王国においてすずめは大いに値打ちがある、というのです。さらにイエスはこの原則を広げ、神がすずめのことをどれほど思っておられるかと、私たちのことをどれほど思っておられるかとを比べられます。「あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている」。これが「まっすぐで、近くて、個人的」でないなら、いったい何がそうなのでしょう。あなたのことを知りたいあまり、頭の毛の数まで数えている人を、あなたはほかに知っているでしょうか。そしてここで、決め手の一言が来ます。「恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である」。

神の王国において、値打ちと意味がどうやって得られるのかが見えてきたでしょうか。それはただ、神が愛をこめて、絶えず私たちのことを思っておられると悟ることから来ます。私たちは間違いなく、神の心にかかっているのです。神は私たちにいのちを与え、心臓を打たせ、人生を楽しめるようにと愛を注ぎつづけておられます。そして、満足と喜びのため、また人に仕えるために、豊かな賜物と才能と能力とを与えてくださいます。ここに神の王国の秘密が、意味の秘密があります。無価値

感とうつ病という牢獄の鍵を開けるのは、これなのです。あなたには、それを信じる勇気があるでしょうか。

ついでにお尋ねします。神があなたのことをどれほど思っておられるか、ご存じでしょうか。これを聞いてください。

> わが神、主よ、あなたのくすしきみわざと、われらを思うみおもいとは多くて、くらべうるものはない。わたしはこれを語り述べようとしても多くて数えることはできない。
>
> 詩篇 40:5

私たちの値打ちが、神が私たちに向けておられる愛の思いによって決まるのなら、この聖句は、私たちが値段のつけられないほど尊い存在だと告げていることになります。私たちへの神の計画と思いは、語り尽くすことも数え尽くすこともできないほど多いと言うのですから。値段のつけられない存在であるとは、どんな気持ちがするでしょうか。もっとも、それがどれほど実感になるかは、神が量りきれないほど私たちを愛しておられるという真理を、私たちがどれだけ信じるかにかかっています。私たちが良い人間であろうと悪い人間であろうと、それは変わりません。これは素晴らしい知らせであり、私はそのことを深く感謝しています。ですから、自分の値打ちを疑いたくなったときはいつでも、すずめを見て、そして信じてください。

第 4 章　家族としての王国

蒸し暑い日でした。部屋には祝いの空気が満ちています。台所からはおいしそうな香りが漂ってきて、舌が期待に浮き立ちます。昔話が語られ、笑い声が響きます。うれしい驚きと愛情の入りまじった空気の中で、贈り物が交わされます。子どもたちは祖母のごちそうをたいらげ、祖父は「ずいぶん背が伸びたなあ」と言います。祖父母の家を訪ねると、たいていこんなふうでした。家族のための時間。自分がどこに属しているかを確かめ直す時間。愛する人たちとつながり直し、贈り物を分かち合う時間。ともに過ごすための、尊く大切な時間でした。

うつ病と無価値感という、ますます大きく口を開けていく顎から私たちを守るうえで、近しい家族があるという感覚ほど大切なものはありません。家族とは、ありのままの自分が受け入れられる場所、自分らしくいられる場所、失敗が赦される場所、そしてただ人生をともに楽しむ場所となりうるのです。

イエスは祈り方を教えてくださったとき、神の王国についての決定的な絵を開いて見せてくださいました。イエスは言われました。「だから、あなたがたはこう祈りなさい。天にいますわれらの父よ……」[17]。最初に呼びかける言葉として、イエスは「神よ」とも、「いと高き陛下よ」とも、「王よ」とも言われませんでした。「われらの父よ」と言われたのです。

神の王国とは、家族である

[17]マタイによる福音書 6:9

当たり前のことに思える方もいるでしょう。けれども、王国が家族であるということの意味は、はるかに広く及びます。その意味を、これからの章で見ていきます。

父なる神が人類に初めて語りかけられたのは、マタイによる福音書3:17 です。時の始まりからイエスの洗礼まで、神は御子を通して私たちに語りかけてこられました。受け継いだ神性の満ち満ちた姿において、イエスこそ紅海を開かれたエホバであり、シナイ山から雷鳴を響かせたエホバであり、ヨシュアを約束の地へ導かれたエホバでした[18]。キリストの洗礼のとき、神の御子はインマヌエル——神われらとともにいます——となられました。私たちの一人としてです。そこで初めて、御父が語られます。その言葉は、いつもそうであるように、深い意味を帯びています。まさにここで、神はご自分の王国の中心にあるものを示されるのです。

「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。神が御子を紹介する方法はいくらでもありました。「これは天と地の造り主である。これに聞き従え」でもよかったでしょう。「これはあなたがたの王である。これに従え」でもよかったはずです。けれども神は、王や支配者の言葉ではなく、家族の言葉で御子が何者であるかを宣言されました。この言葉を分けてみると、こうなります。

1. 「これはわたしの愛する子」＝　その人が何者であるか（アイデンティティ）
2. 「わたしの心にかなう者である」＝　その人の値打ち（価値）

[18]コリント人への第一の手紙 10:1-4

神の王国において、意味と値打ちとは、神との関係によって決まります。これはサタンの王国とまったく対照的です。サタンの王国では、意味と値打ちは、自分や周囲の人間が評価する業績と達成によって決まります。神の王国では、神が父であり、私たちはその子どもです。それが私たちのアイデンティティです。私たちは、何をするかではなく、誰に属しているかによって知られます。神が私たちを子として愛し、絶えず祝福を注ぎ、いつも私たちのことを思い、近くにいたいと願っておられる。その事実が、はかりしれない値打ちの感覚を与えてくれるのです。「恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である」[19]。

神の王国では、私たちのアイデンティティと価値は、神ご自身と同じだけ長く続きます。永遠で、変わることがありません。成功しようと失敗しようと、関係は変わらず、私たちの値打ちは揺るぎません。サタンの王国では、私たちの値打ちは、2001 年 9 月 11 日直後の株式市場と同じくらい安全です。つまり、極端に不安定で、まったく保証がなく、いつか必ず暴落します。私たちはいつも成功すると保証できるでしょうか。励ましと支えを求めている周囲の人たちが、いつも私たちの努力に拍手を送ってくれると言い切れるでしょうか。とても無理です。聞く耳のある人のために言えば、賢い人は砂の上ではなく、岩の上に家を建てたのです。

一人ひとりのアイデンティティを守り、絶望と落胆と無価値感と死の人生に入り込まないように救うため、神はご自分の王国の中心に、関係を守る一つの律法を据えられました。それは二種類の関係を扱っていま

[19]ルカによる福音書 12:7

す。私たちと天の父との関係。そして、神の王国における兄弟姉妹としての、互いの関係です。だからこそイエスはこう言われました。

> イエスは言われた、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。(38) これがいちばん大切な、第一のいましめである。(39) 第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。(40) これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」。
>
> マタイによる福音書 22:37-40

この二つの大いなる戒めは、神の子としての私たちのアイデンティティと価値を守るために置かれています。そしてこの二つは、もちろん十戒をまとめたものです。十戒が、あなたが自分の値打ちを失わないために欠かせないものだと、考えてみたことがあるでしょうか。神の王国において、十戒は関係という文脈の中で理解されます。その関係を断ち切るなら、あなたは自分のアイデンティティを壊しているのです。そしてアイデンティティが壊れたとき、死があなたを抱きしめようと待ちかまえています。罪の支払う報酬は死である、という神の言葉には、恣意的なところは何一つありません。罪は――聖書はそれを律法を犯すことと定義しています[20]――私たちのアイデンティティと価値を壊します。アイデンティティと価値が失われたとき、魂は死を渇望します。うつ病と自殺が今日の社会で最大の問題になっているのは、まさにこのためです。答えは単純です。罪です。神がなぜこれほど罪を憎まれるのか、見えてきたでしょうか。罪とは、神の子としての私たちのアイデンティティと価値を奪う強盗です。だからこそ神は、罪を滅ぼすと決意しておられるのです。

---

[20]ヨハネの第一の手紙 3:4

ここまでのことを、手短にまとめておきましょう。

・神の王国は家族である。

・神は私たちの父であり、私たちはその子どもである。

・一人の人間としてのアイデンティティと価値は、神との関係にもとづいている。

・神の王国は関係の王国であり、私たちと神との関係、そして互いの関係の上に成り立っている。

・これらの関係は、十戒によって守られている。

・戒めを破ることは、私たちのアイデンティティと価値を壊すことである。

第 5 章　家族の危機

顔を見ただけで、この人は何か大きな傷を負ったのだとわかりました。目の下のくまが、平静を装おうとする懸命な努力を裏切っています。私は尋ねました。「大丈夫ですか」。

「妻と別居しているんです」。彼は苦しそうに言いました。「まさかこんなことになるとは、思ってもみませんでした」。悔いに沈んだ声でした。私たちは彼が直面している問題について話しました。すると彼は突然こう言ったのです。「子どもたちに会えないのが、どうしても耐えられない。身を切られるようです」。彼が必死に自分を保とうとしているのがわかり、その痛みが私にも伝わってきました。何か力になれたらと、心から思いました。最後に彼はこう言いました。「もう、どっちが上なのかもわからないんです。自分がどこへ向かっているのかも」。

別居と離婚という苦しい土地を通ってきた人だけが、この言葉の背後にある感情を理解できるでしょう。望まないほうの側が味わう衝撃と怒りと悲嘆は、しばしば伴侶の死に匹敵すると言われます[21]。離婚がもたらす現実は、財産を分けるといったことにとどまりません。それは、自分が何者であるかを丸ごと定義し直すということなのです[22]。

もちろん、いちばんの犠牲者は子どもたちです。出来事のそのときだけでなく、その後の人生のあいだじゅう、子どもの心を通り過ぎていく破壊的な感情の幅は、決して数え尽くすことができません。

---

[21]Nelly Zola and Renata Singer, True Stories from the Land of Divorce, (Pan Macmillian, Sydney, 1995) p 2.

[22]同書

ジム・コンウェイは、離婚家庭に育った何百人もの大人を調査しました。彼らが感じていた感情は、次のとおりです。

不幸だと感じた　72 パーセント

無力だと感じた　65 パーセント

孤独だと感じた　61 パーセント

恐れを感じた　52 パーセント

怒りを感じた　50 パーセント

見捨てられたと感じた　48 パーセント

自分が拒まれたと感じた　40 パーセント

自分には値打ちがないと感じた　30 パーセント

子どものときに離婚を経験したことで、その大人たちには次のような問題が残りました。

絶えず承認を求める　58 パーセント

過去の一部を締め出している　54 パーセント

自分を厳しく裁きすぎる　53 パーセント

自分を重く受け止めすぎる　47 パーセント

自分にはどうにもできない状況に過剰に反応する　42 パーセント

今も人間関係に問題を抱えている　40 パーセント[23]

[23]Conway, p 31.

神が「わたしは離縁する者を憎み」[24]と言われるのも、不思議ではありません。どのように起こったにせよ、どちらがどちらを去ったにせよ、家族関係が失われることは、関わるすべての人にとって破壊的です。家族関係が壊れるとき、勝者はいません。ところが、まさにこれと同じことが天で起こりました。神の家族は、最初に造られた愛する子が神に背を向けたとき、その危機によって引き裂かれたのです。

聖書はヨハネの黙示録 12:7 で「天では戦いが起った」と述べています。この一節を読むと、二人の王とその王国との戦争を思い浮かべたくなります。けれどもこの戦いは、神の家族が引き裂かれることでした。神が初めてルシファーを造り、その新しい子をそっと抱かれたときのことを想像できるでしょうか。神はご自分の心と魂そのものを、この天使と分かち合われました。愛以外のものは何一つ示さず、家族としての統治の最も高い場所で仕える特権をお与えになりました。ところが今、その子は怒りと反逆の言葉を吐き出しています。欺きと偽りの影の中を動きまわり、神のほかの多くの子らの心を毒していきます。その悲しみが想像できるでしょうか。あれほど完全に造られたルシファーが、今は憎しみと殺意に満ちている。彼は神の永遠の御子を滅ぼすことに取りつかれていました。イエスは、サタンは初めから人殺しであったと明かしておられます[25]。その思いの実体は、サタンがイエスを消し去ろうとしたカルバリの十字架において、はっきりと現れました。

神が子ルシファーを失って感じられた喪失を、誰が推し量れるでしょうか。私たちはダビデとアブサロムの物語の中に、神の心のこだまを聞くことができます。

---

[24]マラキ書 2:16

[25]ヨハネによる福音書 8:44

> 王はひじょうに悲しみ、門の上のへやに上って泣いた。彼は行きながらこのように言った、「わが子アブサロムよ。わが子、わが子アブサロムよ。ああ、わたしが代って死ねばよかったのに。アブサロム、わが子よ、わが子よ」。
>
> サムエル記下 18:33

ダビデの美しく麗しい息子アブサロムは、父を殺して王国を奪おうとしました。けれどもダビデの軍が息子の軍を破り、アブサロムは戦いの中で殺されます。ダビデは勝利を喜ぶかわりに、反逆した息子を失って泣きました。家族が引き裂かれるとき、勝者はいないのです。

ここで思い出しておくことが大切です。神の王国では、一人の人のアイデンティティと価値は、造り主なる神、天の父との関係の中に結ばれています。ルシファーがその関係から一歩踏み出したとき、彼は精神的にも感情的にも自殺し、思いもよらなかった暗い感情の水門を開いてしまいました。ルシファーが反逆する前に「あなたは誰か」と尋ねたなら、彼は静かな確信をもってこう答えたでしょう。「私は神の子です。そして神は私を愛しておられます」。ところが父を拒んだあとで同じ問いを投げかけたら、彼は何と答えられたでしょうか。彼にはもうアイデンティティがありません。自分でそれを壊してしまったのです。その時点から自分のために作り出そうとするアイデンティティが何であれ、天の父との親しい関係を断ち切ったことから生じた空しさと喪失感を、決して埋めることはできませんでした。

彼は何度も、失ったものを取り戻せたらと願いました。けれども高慢がそれを許しませんでした。そればかりか心の奥では、あれほど厚かましく恩を仇で返し、公然と反逆した自分が赦されるとは、どうしても信じられなかったのです。ルシファー、今はサタン、すなわち「敵対する

者」[26]は、ひとり立っています。抱きしめてくれる者はなく、頼れる親のような存在もなく、帰る家もありません。今やサタンを動かしているのは、無価値感から生まれるあらゆる感情です。不安、恐れ、空虚、ねたみ、高慢、自己弁護、傲慢、激情、怒り、そして人を支配しようとする心。

サタンにはもう、どちらが上なのかもわかりませんでした。自分が何者かを定義し直し、内側に感じるあの空しさ、あの無価値感、あの無というものを、どうにかして覆い隠さなければなりません。自分には値打ちがないと感じるどの子どもとも同じように、サタンは不安と恐れと狂気のしるしを、そして誰からでもいいから認められたいという必死の欲求を、そのまま帯びています。彼は注目を渇望します。その空しさを満たすために、彼のゆがんだ性質は、崇められ、慕われ、愛されることを求めてやみません。痛みと孤独と無価値感を取り去ってくれるなら、何でもいいのです。この悲しい姿は、『シティ・オブ・エンジェル』という映画の中の歌に、驚くほどよく映し出されています。

この歌は、いつまでも自分は足りないという思いに疲れ果て、そこから逃れて空っぽになり、重さのないものになりたいと願う心を歌っています。後半では、どこを向いても背後にハゲタカと盗人がいて嵐がやまない中で、自分の欠けているものを埋め合わせるための嘘を積み上げつづける姿が歌われます。

サタンは値打ちの土台としての関係を拒んでしまったので、関係にもとづく王国を築くことはもうできませんでした。残された道は一つだけです。誰に属しているかではなく、何をするかによって知られること。けれどもこの王国は、いのちも知恵も愛もすべて神から来ると誰もが認

[26]訳注：「サタン」は「敵対する者」という意味です。

めていたら、成り立ちません。そこでサタンは「内なる力」という原則を発明しました。神を、人格的な関係を持ちえない力へと格下げするためです。思いのままに使い、思いのままに濫用できる力へと。サタンの王国は、力と業績と快楽追求の王国です。その中心にある主張はこうです。誰に対しても責任を負うな。自分の役に立つ者だけを大事にせよ。

もちろん、この王国は滅びる定めにあります。それを支えているいのちの力が、生きた人格に属しているからです。そしていつの日か、その方を拒んだという罪悪感が、神の子としての自分のアイデンティティを頑として認めない者たちのいのちを、押しつぶすことになります。滅びる定めにあるのは、そのアイデンティティを拒むことから来る痛みと喪失を、何ものも取り去ることができないからです。ここに「よこしまな者には平安がない」という言葉の真実があります。

この文脈でエデンの園に戻ってみると、こう見えてきます。外から見れば、サタンは天の統治を覆そうと狡猾に立ちまわる、賢い存在に見えます。けれども内側にあるのは、空しさと不安に満ちた心です。新しいアイデンティティをどうにか作り上げ、ますます広がっていく絶望の裂け目から逃れようともがいている心なのです。

第 6 章　地上の地獄

これは人生でもっとも胸が張り裂ける経験の一つでしょう。何年もかかったかもしれません。けれども時をかけて、あなたはある人と本当に深い友情を築きました。一緒に過ごすことが心から楽しい相手です。ところがある日、その友人の様子が少しおかしいことに気づきます。気のせいだ、たいしたことではないと自分に言い聞かせようとします。けれども時が経つにつれて証拠は積み重なり、とうとうあなたは、いったい何があったのかと尋ねずにいられなくなります。明らかな壁を乗り越えるのに永遠とも思える時間をかけたあと、あなたは知るのです。誰かがあなたのことでその友人に吹き込んでいて、そのせいで友人があなたの行動を、あきれるような形で受け取っていたのだと。

理屈が通れば、この誤解はすぐに解けるはずです。ところがそうはいきません。あなたが筋の通った説明をしようとすると、今度は隠しごとをでっち上げようとしていると、悪びれもなく責められます。この時点で、いくつもの感情のどれかがあなたを飲み込みます。傷。痛み。怒り。あるいは打ちのめされるような思い。友人はあなたに一言も確かめないまま、他人の言うことをこうもたやすく信じたのです。あなたをかばうどころではありません。そしてあなたの怒りの爆発か沈黙かが――どちらであれ――その「友人」に、やはり自分は正しかった、聞かされたことはすべて本当だったのだ、という合図を送ってしまいます。傷口に塩を塗るとは、まさにこのことです。

今の二段落を読みながら、痛む記憶が浮かんできた方もいるでしょう。この場面は、この地上でほとんど時の始まりから、何度も何度も繰

り返されてきたのです。私自身、書きながら自分の経験を思い出し、手を止めてもう一度こう問います。「なぜなのか」。

私たちの多くは、こうした形の拒絶による傷跡を持っているはずです。そしてその傷跡は、ささやかな形ではあれ、アダムとエバが知識の木の実を食べた直後に神が何を感じられたかを理解する助けになると思うのです。見知らぬ者の言葉が、最良の友どうしを引き裂くことができる。これは人生最大の謎の一つです。

私はよく想像します。娘エバが園の真ん中で、突然あの「見知らぬ者」と言葉を交わしはじめたとき、神はそれを間近でじっと見つめておられました。神がエバのためにどれほどの時間を注ぎ、数えきれないほどの愛のしるしを見せてこられたことか。エバは天の父の守りと愛にとどまるでしょうか。それとも蛇を通して語るサタンの言葉を受け入れるでしょうか。なぜ神は介入し、御使を送って、その関係が断ち切られるのを止めてくださらなかったのでしょうか。この場面には答えるべき「なぜ」がたくさんあります。そのすべてを扱う紙数はありませんし、実際、いくつかは御顔を仰ぐ日まで完全には答えられないでしょう。けれども中心にある答えは、愛です。

愛は、選ぶ自由を与えます。その選択が、自由を与えた側をひどく傷つけるとわかっていてもです。もし神が、子どもたちが誤った方向へ進もうとするたびに介入する方であったなら、実のところ子どもたちに選択などなかったことになります。教える時があり、正す時があります。けれども同時に、自由を与えた側の沈黙こそが、それまで語ってきた「わたしはあなたを愛している」という言葉のすべてを裏づける、そういう時も来るのです。選択のない愛は、そもそも愛ではないからです。これは、子どもを育てるすべての親が格闘する現実です。教え、導いたあとで、なお子どもが私たちに逆らう道を選ぶとき、拒まれる痛みを避け

るために、私たちはそれを禁じるでしょうか。それとも黙って悲しみ、私たちを拒む自由を子どもに残すでしょうか。どの親にとっても、つらい選択です。

愛の強さをまとって、神は黙って見つめておられます。大切な娘エバが、愛する息子アダムを滅ぼす道具になっていくのを。このとき神の心の痛みは、はかりしれないものだったに違いありません。娘を失った痛みが、神をアダム救出へと駆り立てたでしょうか。いいえ。神の愛は深く嘆きながら、沈黙のうちに待ちます。神がまことに自由と選択の神であることを、疑いようもなく示しながら。神はアダムに自分で選ばせるのです。ここで「試し」という言葉を使うとき、どうか、こんなばかげた考えを抱かないでください。神が天の安全な場所から試験の様子をのんきに眺めていて、アダムとエバが天のクラブに入る資格を備えているかどうか見定めていた、という考えです。試されていたのは、アダムとエバと同じくらい、神ご自身でした。アダムとエバが倒れれば、世界の創造の前に御子が申し出ておられたこと[27]——世のために自分のいのちを与えるという申し出——が現実になる。神はそれをご存じだったのです。キリストは、御父がどのような方であるかを人々に示し、彼らの罪責をご自分の身に引き受け、彼らのいのちではなくご自分のいのちがそれに押しつぶされるにまかせられる。エバが、そしてアダムが神に背く選択をするのを黙って見つめておられたとき、神はこのすべてを完全にご存じでした。その沈黙の中には、どれほどの愛があったのでしょうか。この愛の証明は、神が最初の両親を扱うにあたって自己中心の動機に動かされていた、などという誤った考えを、永遠に取り除きます。

[27]ペテロの第一の手紙 1:20、ヨハネの黙示録 13:8

第 1 章では、アダムとエバがあの木の実を食べたときに受け入れた哲学について考えました。前の章では、私たちが神なしで生きられる、そして自分の達成によって自分のアイデンティティを作れる、という考えをサタンが作り出すに至った、悲劇的な感情の入りまじりについて考えました。アダムとエバの胃液がまだあの実を消化しているあいだにも、無価値感と罪悪感の吐き気を催す雲が、少しずつ二人の心を包んでいきました。そして神と人とのあいだにあった、あの美しく、幸いで、喜びに満ちた関係を閉ざしてしまったのです。デュラセルの木の呪いは陰湿な働きを始め、ほどなくアダムとエバは罪悪感と恐れに飲み込まれました。二人はサタンとその天使たちと同じく、精神的にも感情的にも自殺したのです。二人はアイデンティティと値打ちを失い、自分にできることでは何一つ、それを取り戻せませんでした。自分の力で神の好意へ立ち返ることはできませんでした。関係を壊したのは二人であり、それを回復できるのは神だけだったのです。

このことは、私たち自身の経験を振り返っても自明です。誰かが私たちとの関係を破ったとき、その関係を回復できる力は、破らなかった側にあります。破った側は、その関係におけるいっさいの権限を手放してしまっているのです。

ここで、第 2 章で見たことを思い出しておくことが大切です。神はいのちと知恵と喜びの源です。ところがアダムとエバは、それらをすべて自分の内に持っているという嘘を信じることで、自らその源から自分を断ち切ってしまいました。二人の理性はもはや、無私にも客観的にも働きません。二人の心はすっかりサタンと調子を合わせています。サタンが語る嘘の仮面をはぐ力が、二人にはもうないのです。サタンは神の品性についての偽りの説を、二人の中に注ぎ込みはじめます。それと同時に、おまえたちは悪い者だ、とアダムとエバに告げます。おまえたちは

死んで当然だ、おまえたちは値打ちのない人間だ、と。サタンは今も、私たちのアイデンティティの感覚を壊すことに執念を燃やしています。そのためにサタンが使う手は、神について嘘をつき、私たち自身について嘘をつくことです。神についての嘘と、自分自身についての嘘とを信じているかぎり、私たちは決して神と和解できません。神との関係が回復される唯一の道は、御子に現された神の品性を、本当に知ることなのです。

見知らぬ者が、最良の友どうしを引き裂きました。神が訪れてアダムとエバを呼ばれます。けれども、かつて宇宙で最も美しいと思っていたその声が、今や二人を恐れと絶望のうちに隠れさせるのです。サタンの刷り込みが仕事を果たしました。

ある日、仕事から帰る場面を思い浮かべてください。あなたは子どもとのいつもの幸せな習慣を楽しみにしています。毎日夕方になると、子どもが「パパ、パパ」と歌うように叫びながら玄関から駆け出してきて、あなたの腕に飛び込み、そっと抱きついてくる。ところが家に近づいても、その大切な子が迎えに出てきません。不思議に思って玄関を入ると、恐怖の悲鳴が聞こえ、小さな足音が庭のほうへ急いで逃げていきます。何かが関係を壊してしまったのです。愛があった場所に、今は恐れがあります。自分の声を聞いて子どもが逃げ出すのを、喜ぶ父親などいません。痛むのです。宇宙で最も愛に富み、寛大で、忍耐強く、自由を重んじる方を、罪のせいで恐れるようになる。これは悲劇です。

神はきわめて深刻な板ばさみに直面されました。別の声に耳を傾けている今のアダムとエバに、どう近づけばよいのか。神が発するどの言葉も、今は悪いほうに受け取られます。二人は自分が罪を犯したと知っています。けれども、いのちと知恵の源である神について偽りの考えを受け入れてしまった今、自分が間違っていたと認めるための安心も値打ち

も、二人にはもうありません。罪悪感と不安に支配されて、二人は開き直っています。正直に考える力を失ってしまったのです。

神の忍耐に現れた愛に、私は驚かされます。神はアダムに呼びかけられます。「あなたはどこにいるのか」。知らなかったからではありません。アダムに問題と向き合わせるためです。アダムよ、あなたの心はどこにあるのか。あなたのアイデンティティに何が起こったのか。目に見えるものは、つねに霊的なものを映し出します。アダムとエバが体を隠したことは、二人の心の中で起きている隠れる働きを、はっきりと示しています。二人は、あまりに恐ろしく見える真理と向き合わずにすむように、欺きと偽りを身にまといました。神は二人が問題を診断できるように助け、祝福された解決を届けようとしておられるのです。

アダムは、裸だったので恐れたのだと答えます。この告白は、堕落の前の記述に照らすと興味深いものです。「人とその妻とは、ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった」[28]。実を食べる前もアダムは裸でしたが、恥じてはいませんでした。つまり今、アダムは恥じているということです。ここで使われているヘブライ語（ブーシュ）には、混乱する、うろたえる、失望する、という意味もあります。アダムは混乱と罪悪感と失望に満ちていました。自分が何者かについて混乱し、自分のしたことについて罪悪感を抱いていたのです。

神はここで、アダムの痛みの核心に指を置こうとされます。「あなたが裸であるのを、だれが知らせたのか。食べるなと、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか」。神はアダムに「どうして自分が裸だとわかったのか」とは尋ねておられません。「だれが知らせたのか」と尋ねておられるのです。神はアダムに、彼が聞かされた嘘の張本人を指

[28]創世記 2:25

し示しておられます。言いかえれば、こういうことです。「誰があなたをわたしから逃げさせているのか」。「誰があなたとわたしのあいだに入り込んだのか」。

そしてアダムは直接問われます。「食べるなと、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか」。これは、はいかいいえで答えるべき単純な問いです。ところが今のアダムの頭の中では、神は自分勝手で復讐心に燃える方であり、自分は愚かで値打ちのない者です。そこで彼は、頭の中で二足す二が六十四になるような計算をしてしまいます。「はい」と言えば、神は復讐する方だと今は思い込んでいるので、厳しく罰せられるだろう。「いいえ」と言えば、木から食べたことと嘘をついたことで、二重に罰せられるだろう。逃げ道はないと思い込んだアダムは、自分を守り、正当化しようとします。

「あなたがわたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」。彼はそう責めました。男は明らかに罪を犯しています。にもかかわらず、彼はその責めをエバに、そして最終的には神に着せるのです。ついさっきまで、何が起ころうとともに立ち向かうと誓っていたこの男が、最初の障害でぺしゃんこに倒れる。エバの衝撃が想像できるでしょうか。罪は、人を助け支えるために自分を無私に差し出す英雄を、決して生み出しません。罪の行きつく先は、いつでも「めいめいが自分のために」です。

ここで起きていることを見落としたくありません。アダムの反応を動かしているのは、罪悪感と不安、そこに神の品性についての誤った考えが重なり、さらに大量の高慢がかき混ぜられたものです。もはや自分を神の子と見なせない以上、彼はこの哲学を受け入れるほかありません。「自分で自分を守らなければ、誰も守ってはくれない」。彼がそう考えるのは、自分にはもう父がいないと信じているからです。

ここに罪の大きな痛ましさがあります。父についての絵が間違っていること、そして自分は値打ちのない愚か者ではないことを、神はどうやってアダムに示せるでしょうか。客観的に考える力を失ってしまったアダムに、どうすれば自分の状況を正しく評価させられるでしょうか。まことの知恵の源は神だけであり、アダムはその源から自分を切り離してしまいました。しかも、たとえアダムが考えたとしても、真理に似たものすべてを激しく拒む罪悪感と高慢の混合物から、どうすればその思考を自由にできるでしょうか。アダムは、あなたは間違っていると神に言われることに耐えられません。たとえそれが彼のための愛から出た言葉であってもです。彼の不安が、彼の理性を支配しているからです。

どうか見ていただきたいのです。アダムとエバがひとたび神から自分を切り離してしまったとき、二人は取り戻すことがほとんど不可能なほど、絶望的に失われていました。二人はすっかりサタンの霊に支配されていました。その心の中には、やがて子孫をして、悪しき天使たちと手を組み、エルサレムで神の御子を殺そうとする必死の同盟へと向かわせる種が横たわっていたのです。表には出ていなくても、二人の心は神とその王国とに、何のかかわりも持ちたくありませんでした。自分では気づかないまま、二人は実際に神を憎んでいたのです。

ここであなたはこう言いたくなるかもしれません。「ちょっと待ってください、それは言い過ぎです。二人に問題があったのはわかりますが、完全に神を憎んでいたというのは、話を大きくしすぎです」。それに対して私はこう答えます。すべての善と愛と知恵とは神から来る、ということを、私たちは絶えず思い出さなければなりません。それは人間の心から生まれるのではありません。この大切な点を忘れると、この物語を正しく読むことも、自分自身を正しく理解することもできなくなり

ます。聖書はこの点をきわめてはっきりさせています。次の聖句を見てください。

> なぜなら、肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである。
>
> ローマ人への手紙 8:7

> 義人はいない、ひとりもいない。(11) 悟りのある人はいない、神を求める人はいない。
>
> ローマ人への手紙 3:10、11

> 心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができようか。
>
> エレミヤ書 17:9

聖書は、私たちの心は生まれつきの状態では神を憎み、神に敵対していると宣言しています[29]。生まれつきの状態において、私たちの心は反逆的で、神の命令に従わず、しかも自分の力でこの状態から抜け出すことは不可能です。私自身の経験でも、この話を分かち合ってきた多くの人の経験でも、この真理に対しては激しい抵抗の霊が働くのを見てきました。人間の本性が神に対して徹頭徹尾敵意を持っているという事実への、この抵抗の霊。それは、自分の失敗の責任を負うかわりにエバと神を責めたときにアダムが現した抵抗の、そのままのこだまです。アダムの不安は私たちが受け継いだものであり、私たちも彼と同じく、この真理に耐えられません。もしあなたがこの考えに抵抗を覚えるなら、なぜそう感じるのかを自分に問うてみてください。もしあなたが自分の内に安心を持っているなら、こうした言葉はまったく気にならないはずで

[29]ローマ人への手紙 8:7

す。アダムの不安と空しさこそ、私たちが受け継いだものです。彼が私たちに与えられるのはそれだけであり、それ以上のものはありません。

人間の本性が神に敵対しているという現実を受け入れられるなら、あなたには本当に良いものが待っています。神が私たちを救おうとしておられる計画という文脈の中で、自分には良いことが何一つできないと悟ることには、はかりしれない自由があります。もう頑張らなくてよいのです。自分の悪い性質が飛び出して、誰かを感情的あるいは肉体的に傷つけてしまったときにも、自分を責めるのをやめてよいのです。けれども、これは先走りでした。次の章まで取っておきましょう。

アダムとエバに話を戻すと、二人と神とのあいだの壁を取り除くことが、いかに巨大な仕事であるかが見えてきます。二人の、そしてその子孫の回復には、次のことが必要でした。

- 人類に、自分たちの絶望的な状態を認める知恵を与える手立て。そして、選択の自由を侵すことなく、正しい方向へ影響を与える道。
- 神の品性と王国について彼らが誤った見方をしていることを示し、神が本当に彼らを愛していることを、どうにかして示す道。
- 彼らの罪悪感と不安を取り除き、神の子としてのまことのアイデンティティと価値を回復する道。
- 彼らの目的の感覚、存在の理由、すなわち行く末を取り戻す道。
- 以上のすべてに時間が必要でした。アダムとエバは自分のいのちを失っていたので、選び、決めるための時間を与える生命維持の仕組みが必要でした。
- これらすべてを行いながら、神は義を保たなければなりません。彼らの反逆を見過ごして「かまわない」と言うわけにはいきません。神はあわれみによって、選択の結果のすべてが彼らに降りかかるこ

とを許されませんでしたが、それでもアダムとエバは、自分たちのしたことの誤りに気づきはじめるために、自分の選択の結果を理解しなければならなかったのです。

ここで、どうしても述べておきたい大切な点があります。神は不意を打たれたのではありません。御父と御子は、もしこの事態に至ったら何をするかを、すでに決めておられました。計画はすでに置かれていました。この絶望的な状況に応えるのに十分なほど、広く行き届いた計画がです。

第 7 章　天からの救いの綱

人間に可能な最も高い愛を説明しようとして、ギリシャ人はアドメートスとアルケスティスの物語を作りました[30]。使徒パウロは、ローマ人への手紙でこの物語をほのめかしています。

> 正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。
>
> ローマ人への手紙 5:7

アドメートス王はもてなしと公正で名高く、国じゅうから愛されていました。神アポロンは父ユピテルによってオリンポス山を追われ、神性を脇に置いて人となり、奴隷として人に仕えよと命じられます。地上へ来たアポロンを、アドメートス王は貧しい物乞いとして見いだし、あわれみました。王は彼に食事を与え、羊飼いとし、息子のように扱いました。12 か月ののちアポロンは神の姿に戻り、助けてくれたことをアドメートスに感謝して言いました。「もし将来わたしの助けが必要になったら、ただ求めなさい」。

しばらくして、アポロンはアドメートスのもとへ戻り、冥界の神ハデスがまもなく彼を迎えに来ると告げます。アポロンは、ハデスの妻ペルセポネと取り決めをしたと言いました。もし彼の代わりに死ぬ者が見つかれば、彼は死ななくてよいというのです。

アドメートスは両親のもとへ行き、代わりに死んでくれないかと頼みました。両親は言いました。「息子よ、わたしたちはおまえを愛してい

[30]https://en.wikipedia.org/wiki/Admetus

る。おまえは善良で優しい人間だ。けれども、わたしたちは自分の命のほうをもっと愛している。おまえのために死ぬことはできない」。王は国じゅうを巡って、自分のために死んでくれる者を探しましたが、一人も見つかりませんでした。アドメートスが運命を受け入れたそのとき、妻アルケスティスがアポロンに叫びました。「ああ、愛するアポロンよ。あなたはわたしの夫を祝福し、この国全体でその名声と富とを十倍にしてくださいました。アドメートスはこれほど善い人で、民は彼をこれほど必要としています。この人は生きるべきです。わたしが夫の代わりに死にます。夫が生きられるように」。そしてそのとおりにしました。国じゅうが、善き王のために死んだ善き妻を悼みました。彼女は民に深く愛されていたのです。彼女がペルセポネの前に立ったとき、ペルセポネは彼女をあわれみ、夫に示した誠実さの報いとして、もう一度生きることを許しました。こうしてアドメートスとアルケスティスは年を重ね、アポロンは二人の誠実さに報いつづけました。そしてついに老いた二人のもとへ死が訪れたとき、二人はそれを迎える備えができていたのです。

「これこそ」とギリシャの哲学者たちは言いました。「存在しうる最も偉大な愛の形だ。人が友のために自分の命を捨てること、これである」。多くの人が、この物語をイエスの言葉と結びつけます。

> 人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。
>
> ヨハネによる福音書 15:13

けれどもこれは、神の愛の高さの表現ではありません。むしろ、人間の愛の限界の表現です。使徒パウロは、人間の愛の限界を語るこのギリシャの物語と対比して、こう告げます。

> 正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。(8) しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。(9) わたしたちは、キリストの血によって今は義とされているのだから、なおさら、彼によって神の怒りから救われるであろう。(10) もし、わたしたちが敵であった時でさえ、御子の死によって神との和解を受けたとすれば、和解を受けている今は、なおさら、彼のいのちによって救われるであろう。
>
> ローマ人への手紙 5:7-10

神は、私たちのそむきの罪のために御子が傷つけられ、私たちの不義のために砕かれるにまかせることによって、ご自分の愛の深さを現されました。神を憎み、さげすんだ敵のために、その敵への大いなる愛とあわれみのゆえに、御子をお与えになったのです。これは人間の愛ではなく、神の愛です[31]。

人類が造られる前、御父と御子は、聖書が「平和の計画」と呼ぶ深い語らいの中におられました[32]。そのとき、人類がご自分たちに背く選択をした場合にどうするかの計画が立てられていました。今こそ、それを実行する時です。神の苦しみを、誰が推し量れるでしょうか。御子をアダムの身代わりとして、その選択の結果を負わせられるだろうか。御子に彼らの無価値感と絶望とを引き受けさせ、それを墓まで運ばせられるだろうか。

---

[31]詳しくはロバート・ウィーランド著『世界をひっくり返した言葉』を参照してください。http://fatheroflove.info/download/view/863

[32]ゼカリヤ書 6:13

この言葉を書いている今、息子が私の向かいで静かに座っています。私はその美しい顔に目をやり、心の中に喜びと愛が湧き上がるのを感じます。そこで私は自分を神の場所に置いてみようとします。人類が私の息子を殺すのを許し、人間が実は殺人者であり、サタンと組んで私と私の立つすべてを憎んでいることを明らかにさせるのです。正直に言えば、私の心はそこで働くのをやめてしまいます。私は自分にその考えを許すことすらできません。考えるだけでも耐えがたく、崩れ落ちてしまうとわかっているからです。思いは神とその板ばさみへ戻り、私はただ茫然とします。そしてそれを許してくださった神に、この上ない感謝を覚えるのです。私もまた、神の敵であり、罪深い生き方によって御子の殺害に加担した者の一人でありながら、神のはかりしれない愛によって完全な赦しを差し出されているのですから。この思いはいつでも私の足を止め、限りない愛と犠牲のゆえに、感謝をもって神を礼拝させます。

のちに人となられたイエス、神の御子が、私たちのためにこれを進んでしてくださったことに、私は驚かされます。聖書は、神が初めから終わりを知っておられると告げ、御父はその知識を御子と分かち合っておられました。ひとたび罪が宇宙に入り込むと、それがどこへ行きつくかを、御子は正確に知っておられました。地上へ来られたとき何が待っているかを、キリストは見ることができました。拒絶、殴打、あざけり、憎しみ、のろいと悪態、十字架の上での裸と暗黒、のしかかる何十億という魂の無価値感、幾世代にもわたって積み上げられた罪責と悲しみ。そのすべてを見たうえで、神の御子はこう言われます。「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」[33]。神の御子はしぶしぶ承知されたのではありませ

[33]詩篇 40:8

ん。むしろ、そうすることを望まれたのです。その心は、御父の心と同じく、子どもたちを、彼らの行き先である満ちあふれる喜びへと回復することを切望しています。これはどのような神でしょうか。誰にたとえられるでしょうか。この方をたたえるのに、どんな言葉が足りるでしょうか。

前の章で、アダムとエバには生命維持の仕組みと、真理と誤りを見分ける力とが必要だったと述べました。二人には、神についての真理を見、サタンが語る嘘を見抜き、暴き、拒むための助けが必要でした。霊的な真北を指し示す、道徳の羅針盤が必要だったのです。

そのすべてが、神の御子という賜物を通して世に備えられました。このことは創世記 3:15 でアダムとエバに告げられています。神はサタンに直接語りかけて、こう言われました。

> わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう。
>
> 創世記 3:15

この一節は約束と希望に満ちています。神は、サタンと女とのあいだに恨み（敵意）を置くと言われました。神が「女」と言われるとき、それは女から出てくるすべてのもの、言いかえれば人類という家族全体を指しています。「敵意」という言葉は、憎むこと、敵となることを意味します[34]。神は、悪を憎み、善と真理とを求める何かを、人類の心の中に置いてくださるというのです。神がこれをなしえた理由はただ一つ、御子が地上での生涯と死とを通して人類を神と和解させようとしておら

[34]Vine's Expository Dictionary — Enmity（敵意）

れたからです。これが、女のすえとサタンのすえとのあいだに憎しみが存在するということの意味です。パウロはローマ人への手紙で、この悪への憎しみを恵み、あるいは力と呼んでいます。

> しかし、恵みの賜物は罪過の場合とは異なっている。すなわち、もしひとりの罪過のために多くの人が死んだとすれば、まして、神の恵みと、ひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、さらに豊かに多くの人々に満ちあふれたはずではないか。
>
> ローマ人への手紙 5:15

正しいものを選ぶ力は、御子という賜物を通して神が私たちの心に置いてくださった、この敵意から直接来ています。この同じ賜物はまた、どうしても必要な、いのちという賜物をも与えます[35]。パウロはローマ人への手紙の同じ章で、この事実にも触れています。

> このようなわけで、ひとりの罪過によってすべての人が罪に定められたように、ひとりの義なる行為によって、いのちを得させる義がすべての人に及ぶのである。
>
> ローマ人への手紙 5:18

これは、はかりしれない平安と喜びをもたらす、驚くべき真理です。この事実が意味しているのは、あなたが吸う一つひとつの息が——あなたが神の御子とその犠牲を信じていようといまいと——イエス・キリストから直接来ている、ということです。あなたの心臓を打たせ、息をさせ、あなたを生かしているのは、キリストのいのちなのです。私たちの

[35]ここで「いのち」と言うとき、それは永遠のいのちではなく、猶予として与えられているこの世のいのちを指します。神は、ご自分とその王国についての真理を選ぶか拒むかを決めるために、すべての人にこの地上でのいのちを与えておられます。

側では不随意と呼ばれる働きのすべてが、実は神の側では随意の働きなのです。神こそ、次の真理の中心におられます。

> こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。(28) われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。
>
> 使徒行伝 17:27、28 前半

神が私たち一人ひとりから遠く離れておられないのは、十字架の死による御子の執り成しによって、私たちがイエス・キリストのいのちに支えられているからです。もしあなたが神から遠く離れていると感じているなら、実際には、神は決してあなたから離れておられません。自分の脈に触れてみるだけで、神が去っておられないことがわかります。

そのうえ神は、正しいことをしたい、悪に抵抗したいという願いを、私たちの心に置いてくださいます。そう考えれば、私たちには本当に感謝すべきことがたくさんあります。何か悪いことをしたい誘惑に駆られ、それから思い直してやめた、そのときのことを思い出してください。それこそ、神があなたに与えてくださった賜物、悪への敵意です。あなたが神を信じていようといまいと、それを働かせようと選ぶとき、この賜物はイエスを通してあなたに与えられています。聖書は、神が善人にも悪人にも雨を降らせてくださると告げています[36]。サタンがあなたに何かをしよう、あなたのものを奪おうという悪い思いを誰かの心に置いたとき、神がその人の心に置かれた敵意が、それをやめるようにと促した——そんなことが何度あったか、考えてみてください。もちろん、その促しを拒んで悪を行う選択も、私たちには残されています。け

[36]マタイによる福音書 5:45

れども、もしその敵意がなかったなら、心に置かれた悪い思いを実行に移すことを、私たちの誰一人として止められなかったのです。

私たちのためにこれほどのことをしてくださる父とは、なんという方でしょうか。人類は完全に失われ、サタンの悪しき道に縛られていました。自分を助けることなど到底できず、惨めさと全き滅びに定められていました。それでも私たちの優しい天の父は、私たちを見捨てることを拒まれました。神はご自分の持つ最も尊いもの――御子を、私たちに与えてくださったのです。イエスは永遠に人類家族の一員であり、私たちの一人でありつづけられます。それは、永遠にわたって学び、思いめぐらすべき中心の主題となる犠牲です。

これらのことを思うとき、神があなたのためにしてくださったすべてについて、あなたはどう感じるでしょうか。神の霊は今、あなたを引き寄せ、神を受け入れ、神についての真理を信じるようにと招いておられます。神はあなたに知ってほしいのです。神は真剣にあなたを愛しておられ、あなたを取り戻すためにすべてを与えられた、ということを。私はこの種の愛に抵抗できません。私にとってあまりにも心を打つものだからです。あなたはいかがでしょうか。

第 8 章　二つの王国を比べる

先へ進む前に、今この世界に存在する二つの別個の王国を、まとめておくと役に立ちます。神の永遠の王国と、サタンの王国です。この二つは、どちらもエデンの園でアダムとエバの前に差し出されました。王国とは何かを少し考えてみると、押さえておくべき三つの要素があります。

- 統治――その王国がどのように治められるかという仕組み。たとえば民主制か、独裁制か。
- 通貨――その国民が持ち物を交換するための、価値の体系。
- 国籍――どうすればその王国の一員になれるかを定めるもの。

この二つの王国は、次のように対比できます。

	神の王国	サタンの王国
統治	家族	最も強い者
通貨	愛・あわれみ・自由な選択・神への信仰	力・資産・強制・自分への信頼
国籍	神の子であること	業績と達成

神の統治は家族という仕組みの上に成り立っています。統治の頭は父です。統治する側とその国民との関係は、近しく、親密です。一方サタンの王国は、最も強い者であることが問題です。最も強い者が支配します。民主制においてさえ、自分の主張を宣伝するのに最も強く、有権者を説得するのに最も強い者が、権力に上っていきます。

神の王国は、関係の強さを取引します。愛が天の通貨です。国民は父の愛の中で安心しており、自分の値打ちを証明する必要がありません。

裏の思惑なしに、無邪気に互いの交わりを楽しむことができます。神を知るようになることが最高の喜びであり、最高の望みです[37]。そして神の知識と知恵と品性には限りがないので、この喜ばしい仕事は決して終わりません。神について学ぶことは、いつでも残されています。国民は、神から直接に、あるいは神が造られたものを通して、神について学びます。ですから互いを見つめ合うことも、自然と宇宙を研究することも、この王国に属する喜びの一部です。すべてが父から来ていることがはっきり認められているので、すべての被造物が喜びと感謝をもって父を礼拝します[38]。

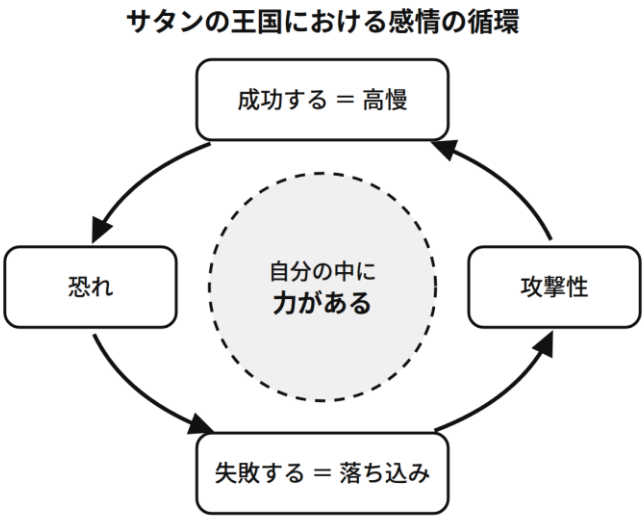
これとは対照的に、サタンの王国は資産を取引します。値打ちは達成から来るので、値打ちある者であるためには資産を積み上げることが欠かせません。この資産は物質的なものでも、知的なものでも、人間関係でもかまいません。家が大きいほど、持ち物が多いほど、あなたの値打ちは大きくなります。学歴が高いほど、職の地位が高いほど、あなたの値打ちは大きくなります。付き合う相手は非常に重要です。人はあなたの目的にとって大きな資産になりうるからです。サタンの王国は、人が内なる力を持っていると信じています。ですから、他人を所有すれば、あなたはもっと力を持てるのです。人との関係は、より多くを得るための道具になります。そのため、他人を支配することがとても重要になります。他人を支配する方法はいくらでもあります。親切で愛想よくふるまうのは、よくある手です。営業の人たちは、いつもこれを使います。立派な行いで人を感心させ、従わせることもできます。それも失敗したら、力と脅迫と威嚇によって人を支配し、忠誠を確保することもできま

[37]ピリピ人への手紙 3:9、10

[38]ヨハネの黙示録 14:6、7、ヨハネの黙示録 4:1-9

す。今日これほど多くの人間関係が痛みと悲しみに満ちているのは、このためです。多くの場合、人は自分の値打ちを増やすために結びついているのです。

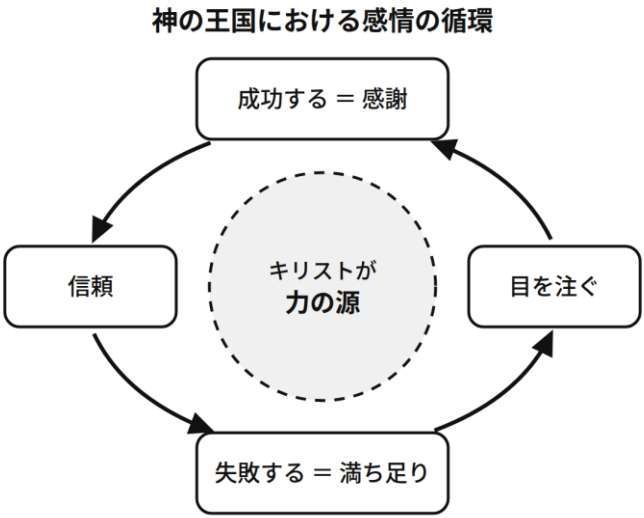
もう一つの対比が国籍です。神の王国では、あなたはただ神の子であるというだけで国民と認められます。人生の状況や困難がどうであれ、この事実は決して変わりません。あなたの国籍は、父なる神との関係の中で守られています。サタンの王国では、何かをするか、しないかによって国民と認められます。達成も怠惰も、業績と行為に目が向いているかぎり、あなたに国籍を与えます。この王国では、あなたは毎朝目を覚まし、今日は何を成し遂げれば自分をよく思えるだろうかと考えます。誰かがその達成を妨げれば、あなたは苛立ち、腹を立てます。一日の終わりにあまり成し遂げられなかったと感じれば、空しくなり、落ち込むか、いっそう躍起になるかします。人生は、高慢と無価値感のあいだをぐるぐる回る円環になります。達成すれば高ぶり、失敗すれば自分に値打ちがないと感じる。成功と失敗のあいだにあるのは、達成しようという苛立った決意か、あるいは手に入れたものを失う恐れかのどちらかです。死ぬまで、あるいは王国を移るまで、終わることのない円環です。



この循環は、自分の中に力があると信じることの、単純な結果です。もし自分で自分に力を供給しているなら、私たちは誰にも頼らず、誰からも値打ちを受け取りません。自分の値打ちは自分で育て、生み出さなければならないのです。成功のたびに自分が認められ、失敗のたびに無へと近づいていきます。

初めて講演をするようになったころ、私は心の中の葛藤を覚えています。人々を聖書の真理へ導けたときには大きな祝福を感じました。ところが出口に立って帰る人たちに挨拶していると、よかったと言ってほしい、自分のしたことを認めてほしいと願っている自分に気づくのです。うまく語れたと思うほど、承認を求める心も大きくなりました。こう考えるのは間違いだとわかっていたので、しばらくのあいだ、上手でしたねと言われるたびに「私にではなく、神に感謝してください」と答えていました。けれどもそれはしばしばぎこちなく、相手を突き放している

ように受け取られることもありました。良いものはすべて神から来ること、そして私たちは自分の行いとは無関係に神から価値を認められていることを悟るとき、私たちは成功することも失敗することも自由になります。無価値感を恐れる必要も、他人からの承認を必要とする気持ちも、そこにはありません。



覚えておくべき大切なことがあります。神の王国に属する人たちは、自分の達成から値打ちを得はしませんが、それでもちゃんと達成します。それどころか、はるかに多くを達成する力を持っています。失敗しても、無価値感の恐れと向き合わなくてよいからです。成功しようと失敗しようと、彼らは変わらず愛されており、変わらず神の子です。神の王国こそ、人間関係をずたずたにすることも、自分の値打ちを壊すこともなく、あなたの持てる力を最大限に発揮するための、最良の道を差し出しているのです。

ここまで、この二つの王国の性質を簡単に描いてきました。本書の残りでは、この二つの王国が人類の歴史の中でどのように展開してきたか、そして二つのあいだで生きる私たちがしばしば直面する葛藤を、たどっていきます。どちらの王国も自由を差し出し、どちらの王国も多くを約束します。けれども、揺るがない深い意味と値打ちの感覚をあなたに残すのは、どちらの王国でしょうか。

第９章　バビロンの心

「どこで間違えたのだろう」。今わが身に降りかかっている現実を、どうにか受け止めようともがく父親の、胸の張り裂けるような叫びです。「うちは良い家庭だったし、あの子は自分が愛されていることを知っている」。父親はそう続けます。息子が麻薬の密売と窃盗と殺人で有罪判決を受けたばかりで、その理由を必死に探そうとしているのです。

この胸の張り裂ける叫びは、私たちが想像する以上に、何度も繰り返されてきました。反逆と邪悪の生き方に落ちた子を持ち、その恥と苦悩とともに生きる親たちです。この叫びの源は、私たちの最初の両親と、その長男カインの悲劇にまでさかのぼることができます。アダムとエバが幼いカインを初めて腕に抱いたときの喜びを、親であれば誰でも知っているでしょう。二人の愛の実が、今こうして腕の中にあり、喜ぶことができるのです。エバはこの尊い赤子を抱きしめながら叫びました。「わたしは主なる人を得た」[39]。エバは、カインこそ創世記 3:15 に告げられた、すべての国民に癒しと祝福をもたらす約束のすえだと信じたのです。それが本当であったなら、どんなによかったでしょう。エバにとって苦い皮肉は、カインが残したものが、何百万という人々に惨めさと破滅と死とをもたらすことになった、ということでした。カインは、自分の条件で霊的な経験を営む礼拝者たちの、その一派の頭となりました。この一群こそ、世界の人口の大半を占める人々であり、聖書がのちに「バビロン」という符号で呼ぶ人々です。この章では、この一群を動かし

[39]創世記 4:1 の字義どおりの読み

ている霊と、それがあなたと私にどう影響しているかを、たどっていきます。

「お父さん、どうしてあのかわいそうな、罪のない小羊を殺さなければいけないの」。小羊を屠ることは、キリストに対する人間の生まれつきの思いという現実を、そして悔い改めの必要を、人類の目の前に置きつづけるために定められました。ですからそれは、私たちが自分の状態を見、御霊に引かれて赦しを求めるために、神が進んで払おうとされた代価を明らかにしています。私たちの救いのために、なんという驚くべき賜物が差し出されたことでしょう。それは、ささげられるその瞬間のキリストの苦しみを、まっすぐに指し示す儀式でした。同時にそれは、キリストが御父を現すために地上へ来られる日を、希望をもって前方に指し示していました。またそれは、エデンでの堕落以来、人間がキリストに対して行ってきたことの恥を、後方に指し示してもいました。それは神の驚くべき愛を思い起こさせる慰めであると同時に、人間の忘恩と身勝手さを思い起こさせる痛みでもありました。この礼拝に加わることは、いつでも入りまじった感情を呼び起こしたはずです。罪のない小羊の顔をのぞき込み、その物言わぬ苦しみを見つめることは、身勝手さと自分本位の代価を、強烈に心に刻んだことでしょう。まことの神の小羊の顔をのぞき込むすべての人にとって、希望はつねに、人間の本性がキリストに何をするのかを理解することから来る魂の苦悶と、まじり合うのです。

十字架に対する人間の自然な応答は、二つに一つです。そもそもそのような堕落など起こらなかったと否定して、人類の起源を書き換えるか。あるいは、罪に対する怒りを満たすために神が求めたものとして、その死の要求を神に押しつけるか。ほとんどの場合、十字架は光から闇へと変えられてしまいます。あるいはもっと悪く、希望の象徴として掲

げられながら、実際には嫌悪を催させる操作の象徴として差し出されるのです。

両親が小羊を屠るのを、そして希望と忍耐と来たるべきすえへの確信とがまじった涙と嘆きを、長年見つづけたあと、カインは、へりくだりと悔い改めを必要とすることにもう耐えられなくなりました。屠られた小羊があらわにする人間の失敗のほうに目を向けることで、カインは、そのような賜物に示された神の大いなる愛を思い出すまいと選んだのです。カインにとって小羊は、自分の不安をかき立てるだけのものでした。その不安は、父から受け継いだ生得の分け前であり、父はそれをサタンから受け取っていました。カインにとって小羊は、自分はそのままでは神に受け入れられない、自分のふるまいは神に是認されていない、と告げるだけのものだったのです。当然サタンは、礼拝から小羊を屠ることを取り除くという大胆な一歩を、カインに勧めました。そうして、自分の行いによって悔い改めの必要を取り除き、神との関係を定義し直させようとしたのです。

聖書は、カインが地の実りのささげ物を主のもとへ持ってきたと告げています[40]。またカインは、働きとして食物を生産する農夫であったとも記されています。カインのささげ物は、自分の手のわざによって神の尊敬を勝ち取ろうとする努力の象徴でした。彼は自分の礼拝を、へりくだった信仰から高慢な誇示へと、親密な信頼の関係から契約的な機嫌取りへと、造り変えたのです。そのような宗教は、私たちには神と交渉する力などないという事実を無視しています。私たちには、それを土台にして自分の条件で神に会えるような、自分のいのちなど持っていないのです。悲しいことに、カインはこれを忘れました。サタンは、小羊によ

[40]創世記 4:3

る罪の自覚から自分を解き放つことに自由があると彼に約束しました。けれども小羊を取り除くことで、カインの宗教は、まことの神との信仰の関係から、自分の作り出した神への、業績にもとづく儀式の一式へと変わってしまったのです。この移り変わりの中で、カインはデュラセルの木の毒を受け入れました。行いというパラグライダーに乗って飛び立ったのです。初めのうちは胸のすくような自由を味わったでしょう。けれどもパラグライダーが限界に達し、墜落するのは、時間の問題でした。

第 5 章では、家族関係が壊れることから来る心の傷跡をいくつか見ました。まとめておきましょう。

・絶えず承認を求める

・自分を厳しく裁きすぎる

・自分にはどうにもできない状況に過剰に反応する――つまり、しばしば非常に支配的になる

・人間関係に問題を抱えている[41]

カインが、自分を救うために神が定められた計画から離れたとき、彼は神から遠くなりました。家族としての関係が、完全に壊れてしまったのです。この距離が、彼の不安の炎に油を注ぎました。神の霊はもはや、彼の恐れを静めることも、サタンの嘘に反論する助けをすることもできません。空しさは増すばかりで、恥の感覚は幾重にも重なりました。サタンと同じように、カインは神との壊れた関係の穴を埋めようと、むなしくもがきつづけました。どれほど懸命に努めても、感情のと

[41]Conway, 31

ころで神とその王国とその計画へ立ち返るまで、あの深い空しさを取り除くことはできなかったのです。

カインの荒れた感情は、まもなく噴き出します。それは、カインと弟アベルが神を礼拝しに来た、定められたささげ物の時に起こりました。神はアベルの小羊のささげ物を火で焼き尽くして受け入れられましたが、カインのささげ物には手を触れられませんでした。カインを激怒させるには、それだけで十分でした。罪はまったく理屈に合いません。カインは指示に従わなかったのに、うまくいかないと言ってひどく取り乱すのです。

パンを焼こうと店へ行き、材料を全部そろえる場面を思い浮かべてください。店主に作り方を尋ね、材料の一覧をもらって家に帰ります。ここまでは順調です。ところがイーストのにおいをひと嗅ぎしたあなたは、これは入れないほうがおいしくなると決めます。そしてオーブンに入れ、しばらくして、なんとも情けない平たいパンができあがります。さて、ここで激怒して店へ駆け戻り、パンが失敗したのはおまえのせいだと店主をののしるのは、理にかなっているでしょうか。とんでもないことです。ところがカインが神に対してしたのは、まさにこれでした。

カインは引き返せない地点に近づいています。自分の値打ちが自分の努力と業績で決まる、サタンの王国を受け入れてしまった今、導かれ、正される力は急速に失われていきます。カインは自分が間違ったことをしたと知っています。けれども人間の心はたやすく自分をあざむくもので、へりくだって神に従うかわりに、彼は怒ります。神は優しく彼を助け、正し、約束された御子という賜物へ向き直らせようとされます。けれどもカインは警告に耳を貸しません。反逆の思いは育ち、闇の王国は、その最も成功した人間実験をほぼ完成させようとしています。

このときすでに、カインの心はサタンが天で解き放った感情の力に、すっかり支配されていました。彼は神の是認を欲していました。ただし、自分の条件でです。自分には値打ちがないという思いは、爆発寸前まで高まっていました。彼は恐ろしい状況に捕らえられていました。受け入れられたい、値打ちを認められたいという渇きを満たすために、より高い力からの是認を渇望する。それでいて同時に、自分は神にすべてを負っており、小羊による愛ある備えに対してへりくだって感謝すべきだという事実を、無視したい。アベルの前で「公然と恥をかかされた」ことにまだくすぶっていた彼は、アベルと言い争いはじめます。アベルはカインの礼拝の仕方について訴え、神の計画へ帰るようにと勧めました。カインにはそれで十分でした。彼の内側で何かが切れたのです。自分には値打ちがないという思いが、もうどうなってもかまわないという地点まで彼を追い込みました。そしてその瞬間が来たとき、サタンには支配を握る道が完全に開かれます。サタンはカインを弟への激しい憎しみで満たします。家族の関係は忘れ去られ、サタンの王国がその姿を全面的に現します。天の全体が見つめる中、最初の殺人が起こりました。聖なる尊い関係の、最初の抹殺です。神の律法が破られると、こういうことが起こるのか。天は息をのみます。アベルのいのちのない体が地を赤く染めたとき、サタンとその天使たちでさえ、一瞬の麻痺を覚えたに違いありません。

サタンはこの出来事の恐ろしさを振り払い、自分の奴隷を確実にするために、罪責の感覚をカインの中へ深く押し込みました。神が自分を赦してくださるなど、決して信じられないほど深くです。これがサタンの狂気です。反逆の道を歩むよう、彼は私たちに自由と幸福を約束します。ところが私たちがそれを犯すと、私たちの滅びを神に大声で要求するのも、彼の声なのです。それと同時に、おまえは邪悪で腐りきってい

て、二度と神に受け入れられはしないと魂にささやくのも彼の声であり、私たちが死にたいと思うところまで罪責の感覚を高めるのも彼の声です。あれほど美しい天使が、これほど惨めな破壊者に変わってしまったとは、なんという悲しみでしょう。

カインが完全に一線を越えてしまった今、彼の魂には何の防ぎもなく、サタンは彼を追い込んでこう叫ばせます。「わたしの罰は重くて負いきれません」[42]。これは想像しうるかぎり最も悲しい言葉です。神がカインのもとへ来られたのは、彼を断ち切るためではなく、彼を取り戻すためでした。弟はどこにいるのかと問われたのは、責めるためではなく、悔い改めて神に立ち返る機会を与えるためでした。悲しいことにカインは、あの嘆きの言葉を口にしました。「わたしの罰は重くて負いきれません」。彼は神の言葉ではなく、サタンの嘘を信じたのです。彼はまき、そして今、刈り取りました。

創世記 4:11 で、神はのろいを宣告されます。そののろいの後半で、神はカインに、あなたは地上をさまよう者となると告げられます。この言葉は、震え、よろめく者を表しています。希望も未来もない人間、という響きです。こののろいは、神が天の杖を振って与えられたものではありません。のろいは、神の家族としての王国を拒むことの中に、親密な関係を拒むことの中に、もともと含まれていたのです。彼の魂は苦しめられました。彼は親密さのために造られていたのに、心は別の道を選んでしまったからです。愛を絶えず慕いながら、近づく者をいつも押しのける。近さを求めながら、無価値感の住みつく心の秘密の部屋へは、決して人を入れられない。友を持ちたいのに、自分の力量を脅かす者には

[42]創世記 4:13（欄外訳）

いつも警戒する。ここに「よこしまな者には平安がない」という言葉の真実があります[43]。

聖書は、カインが主の前を去ったと告げています[44]。彼はもう、神が近くにおられるという感覚なしに生きました。自分の罪が神から自分を締め出したと信じることで、彼は実際には、自分のほうから神を締め出したのです。承認と値打ちをかつてなく必要としながら、彼は町を建てはじめました。人々を自分のまわりに集め、その指導者となるのです。大きな建物を建て、自分の成し遂げたものから値打ちを引き出すのです。自分の手のわざで自分を取り囲み、神のわざの証拠を、できるかぎり意識から締め出すのです。自分の魂の状態を自分に問う暇もないほど、忙しくしつづけるのです。

こうしてカインは、地上にサタンの王国を打ち立てる通り道となりました。彼を通して、不安と無価値感のあらゆるしるしを帯びた一つの種族が育っていきました。力と地位を求め、どんな競争相手にもねたみを抱く支配の霊を育て、天と地を造られた神から離れたアイデンティティを、果てしなく追い求める人々です。人間が、関係的で人格的な偉大な神の腕の中ではなく、自分の内側に値打ちを探しつづけているかぎり、サタンは人間を支配できました。そして実際、そうしてきたのです。時代を下るあいだずっと、サタンは一群の人々を自分の支配下に置き、その値打ちのない、不安な魂を自分の魂に縛りつけ、世界を支配しようと図ってきました。

私たちはバビロンの心を学んできました。自分のすることによってアイデンティティと値打ちを求め、自分の手柄への承認を求め、脅かされ

[43]イザヤ書 57:21

[44]創世記 4:16

ないように状況を操ろうとする、苦しめられた心です。次の章では、この心が人類の歴史の中でどう肉づけされていくかを、追っていきます。

第 2 部　一つの行き先

——取り戻されたアイデンティティ

第 10 章　デュラセルの鎖を断つ

二人は抱き合ったまま、長く沈黙していました。感情の深さははかりしれません。けれども二人とも、その時が来たことを知っていました。永遠の日々から、御父と御子はつねに親しい交わりの中におられました。そして今、その交わりが張りつめ、ついには断ち切られようとしています。神の御子はこれから、人間である息子たち娘たちを取り戻す使命へと出発されるのです。御父も御子も、その危険と代価とを理解しておられます。それでも愛が、二人を前へと押し出します。

ほんの一瞬、御父と御子は預言の目で未来を見つめ、その使命が展開していくのをご覧になります。あざけり、拒絶、憎しみ、唾、蹴り、むち、そして釘。そのすべてが、天と地が静止して御父と御子の別離を見つめる、あの恐ろしい一瞬の前では、無に等しくなります。御子は、幾千年もの罪責と苦しみと反逆と無価値感とが、ご自分の上にのしかかるのをご覧になります。そして、罪によって御父の顔が隠されたという感覚に、木の葉のように震え、引き裂かれるご自分の姿をご覧になるのです。御父は闇の中で御子とともにおられます。けれども、あの死の恐怖の中へ私たちの見捨てられた感覚を運んでいかれるのは、御子なのです[45]。

抱擁が強まります。御父はどうして、御子をこの行く末へ渡すことができるでしょうか。さらに深いところで、二人は失敗の可能性と、罪の力への永遠の喪失とに向き合っておられます。神の御子は人間の性質をご自分の上に取られる。それは宿敵サタンに、御子を打ち負かす機会の

[45]ヘブル人への手紙 2:9

窓を開くことでした。成功の保証はありませんでした。どうしてこれほど危険な賭けに出られるでしょうか。どうしてこれほど息をのむ計画を、思い描くことさえできるでしょうか。それでもアガペーの愛が、二人を前へと押し出すのです。

永遠のように思われた長い沈黙が、ついに終わります。二人は計画を実行することを決意しました。御子は天の縁へ歩み出て、御父の愛に満ちた顔を最後にもう一度見つめ、そして去っていかれました。

第 6 章では、地上の息子たち娘たちを救おうとされるなら神が扱わなければならない、長く困難な課題の一覧を見ました。第 9 章では、人間の心の中でサタンの王国が育っていくさまと、サタンが私たちの無価値感を通して私たちを支配していることを見ました。イエスがその力を打ち破ろうとされるなら、その無価値感を取り除かなければなりません。神の子としてのアイデンティティの感覚を結び直し、デュラセルの木で考案された偽りのアイデンティティを克服しなければならないのです。

御使たちが羊飼いたちに、メシヤが来られたという喜びの歌を告げるのを見たとき、サタンの心は深い不吉さに捉えられたに違いありません。博士たちを粗末な馬小屋へ導いた輝く星も、何の慰めにもならなかったでしょう。この気高い幼子を見つめながら、サタンは自分が戦いに直面していることを悟った——そう想像できます。彼はこの子に宿る平安な静けさを、どうしても破ることができませんでした。それまでのどの子どもに対しても、必ずできたことなのにです。不可解でした。この子は肉と血でできているのに、彼にはまったく乱すことのできない深い平安が、その上にとどまっているのです。サタンは自分が窮地に立ったことを知りました。

この乱れた霊は、ヘロデの心にとどまりました。私たちはそこに、暗い霊の世界をかき乱しているものをのぞく窓を与えられます。ヘロデを支配していた深い不安が、天の王国に対するサタンの「衝撃と畏怖」の作戦にとって、彼を格好の餌食にしたのです。本当の勝負が始まる前に、この方を取り除いてしまおう。けれども、幼い王の平安な確信は、見当違いではありませんでした。摂理が逃れる道を備えたのです。それは御子が御父についての真理を現し、闇の支配者を暴き、人間の肉体をまとって、滅びに定められた人類を縛る不安の鎖を断ち切るためでした。

イエスの生涯は、次の言葉に要約できます。

> わたしをつかわされたかたは、わたしと一緒におられる。わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりになさることはない。
>
> ヨハネによる福音書 8:29

サタンが何をしても、あの尊厳と確信の感覚を破ることはできませんでした。キリストは、闇の君主さえ畏れさせるほどの粘り強さで、ご自分が子であることにしがみつかれました。キリストを罪に動かそうとする自分の努力がむなしいことに、サタンは怒り狂ったに違いありません。ついに、サタンに抵抗できる者が現れたのです。四千年ものあいだ、どの一人に対しても成功してきたサタンが、神の子であることに確信を置く一人の人間の魂という、岩のように堅固な壁に激突しました。子であることこそ、勝利の鍵でした。子であることこそ、人類を溺れさせている無価値感の激流に対する、最も確かな砦でした。だからこそ子であることが、キリストと敵とのあいだの争いの焦点でなければならなかったのです。

ナザレの町は興奮に沸いていました。バプテスマのヨハネの知らせが、またたく間に広がります。メシヤの先駆けが来たのです。その知らせが小さな大工の仕事場に届いたとき、イエスは御父の栄光を現す時が来たことを知られました。のみとのこぎりを置き、母を抱き、そしてヨルダンへ向かわれます。

イエスは、ご自分が子であることに確信を持っておられました。けれども、これから荒野で始まる戦いは、これまでどの人間も試されたことのない仕方で、この方を試すことになります。人間の悲しみの門が、決壊したダムのように、この方の上に開かれます。イエスは人間の無価値感の全力を受けとめ、なお立ちつづけなければなりません。もし立ちつづけられるなら、史上初めて、誰かがデュラセルの鎖を断ち切ったことになります。そしてこの勝利の戦利品は、この方を信じる者たちの相続財産となるのです。

荒野での戦いは、十字架のわざの土台でした。人間の魂が自分の無という鎖を断ち切れないなら、赦しの申し出に何の意味があるでしょうか。どれほど美しい愛の啓示も、それを受け取る力が男にも女にも子どもにもないなら、何の益があるでしょうか。何もありません。デュラセルの無価値感と無とが、まず克服されなければなりません。そしてその勝利の戦利品が人類の手に置かれてこそ、すべての人が、十字架という比類のない賜物を受け入れ、神が自分を愛し赦してくださると本当に信じる力を得るのです。

御父は何が来るかをご存じで、戦いのために御子の手を強くされます。力ある示現によってではありません。武器を持つ軍勢によってでもありません。そのどれも、来たるべき敵には通用しないからです。神は最良の武器を差し出されます。互いの関係から来る力づけです。イエスが水から上がられ、鳩が下り、天が開けたとき、イエスは御父の声を

はっきりと聞かれました。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。この言葉こそ、御父が御子に手渡しうる、最も鋭い剣でした。御父の言葉の中に安んじて、御子は狡猾な敵と戦い、私たちには決して断てなかった罪の枷を、私たちに代わって断ち切られるのです。

この宣言の重みは、多くの人が想像するよりもはるかに深いところにあります。神が人類の一員を受け入れておられるという事実は、残る私たちすべてに、はかりしれない希望を差し出します。イエスを通して、神は私たち一人ひとりに手を伸ばし、あなたはわたしの愛する子だと告げてくださるのです。十字架の賜物を受け取ることを望むなら、私たちはまずあの尊い言葉を聞かなければなりません。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。敵からの贈り物は、毒が仕込まれていないか、裏に条件がないかと疑わずに受け取ることはできません。けれども愛する家族からの贈り物なら、そのまま受け取ることができます。ただの贈り物として、純粋に。神の子、神の娘であるという確かな信仰の橋を渡る以外に、十字架へ近づく道はありません。ほかのどの道も、律法主義か、罪への居直りかに行きつきます。

天からのあの言葉は、サタンを激怒させたに違いありません。かつて自分がそうであり、今はそうでないものを思い出させる言葉——子である、という言葉です。それは彼自身の無と空しさを思い起こさせました。それでも高慢は簡単には死にません。そこでサタンは、荒野でイエスの上に誘惑の集中砲火を浴びせる備えをします。

聖書は、イエスが「四十日のあいだ荒野にいて、サタンの試みにあわれた」と記しています[46]。十分間の絶え間ない誘惑でも、たいていの人

[46]マルコによる福音書 1:13

には耐えがたいでしょう。ましてや四十日です。サタンには四千年の試みの経験があり、その腕を磨いてきました。イエスが地獄のあらゆる武器の的にされたことは、確かです。この戦いの深さを、誰が理解できるでしょうか。サタンが神の御子に一撃また一撃を加えるあいだ、全宇宙が息をのんで見つめていました。私たちはといえば、ぐっすり眠っていて、私たちを自由にするためのイエスの英雄的な戦いに、まるで気づいていませんでした。もしここでイエスが敗れていたなら、私たちは皆、自分の無という鎖に押しつぶされていたのです。イエスこそ、闇を貫く唯一の望みでした。

こういうところまで来ると、私は手を止めて、ただこの方のことを思わずにいられません。何と言えばよいでしょう。私たちの絶望的な状況を助けるための、この力ある君の、決してあきらめない努力に、私の心は感謝の喜びであふれます。それは、燃える家に飛び込んで子を救う父か母のようです。この方はサタンによって精神的に押しつぶされる寸前まで行きながら、ご自分が子であることを手放されませんでした。この方は、私の奥深くにあるものにこう叫ばせます。「私にも何か値打ちがあるに違いない。本当に大切に思っていなければ、誰もこんなことはしない」。この愛は、私にはどうしても抗しがたい仕方で、私を引き寄せます。私は抵抗します。けれども、この方が私よりも強い決意を持っておられることを、神に感謝します。

イエスが最も無防備なとき――疲れ、飢え、孤独であるとき、つまり人間を妥協へ追いやるすべてがそろったとき――サタンは核心を突きます。「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」[47]。試みが、子であることをめぐるもの以外であ

[47]マタイによる福音書 4:3

りうるでしょうか。イエスは、荒野にどれだけいることになるのかを告げられていませんでした。四十日ですべてが終わると聞かされたとは、記録にありません。イエスはまだそこにおられ、烏が食物を運んで来ることもなく、天からマナが降ることもありません。天からの声は、思い違いだったのだろうか。「あなたの父は、あなたがこんな状態のままでいることを望まれない。何とかしなさい」。サタンはそうささやきます。

サタンは食欲という手段を使って、御父の言葉に対するイエスの信仰を破ろうとしていました。四十日前、神は「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と言われました。もしイエスが石をパンに変えるなら、神の言葉を疑うことになります。そしてその疑いは、ご自分が何者かを揺るがすのに十分です。それだけではありません。イエスは、ご自分が何者かを証明するために何かをしてみせるよう求められているのです。自分が誰であるかを証明するために石をパンに変えよという要求は、サタンの王国へ通じるまっすぐな扉でした。業績と達成によるアイデンティティです。

自分の値打ちを達成によって証明するという、この罠に落ちなかった人が、どれだけいるでしょうか。頂点に立つ力が自分にあると示そうと駆り立てられ、睡眠と休息を、そして何よりも祈りと聖書の時間を削り、遅くまでオフィスに残り、かけがえのない家族との時間を逃す。昇進やボーナスのためだけに。なぜ私たちはこれほど自分を追い立てるのでしょうか。多くの場合、私たちはこの挑発に応えているのだと、私は思います。「もしおまえが神の息子、神の娘なら、それを証明する立派なことを何かしてみせよ」。

朝目覚めて、静かに神とともに過ごす時間を取りたいと思っているのに、その日にやらなければならないことで頭がいっぱいになりはじめ、

とうとう耐えきれなくなって五分の祈りで妥協し、一日へ飛び出していく。そんなことはないでしょうか。あなたにも起こるでしょうか。なぜでしょう。一日の終わりに、あまり成し遂げられなかったと気づいたとき、あなたはそれでも満足で幸せでしょうか。それとも、がっかりして少し落ち込むでしょうか。病床に横たわって「時間を無駄にしている」ことに苛立ちませんか。その時間があれば、やるべきことの一覧を消していけるのに、と。こうしたことのすべてが、一つの事実を指しています。例外なく私たち全員が、自分のアイデンティティと値打ちを行いによって証明せよという、サタンの誘惑に落ちるのです。心の奥底に、アダムとエバから受け継いだあの不安の要素を抱えているために、私たちは自分を覆う霊的・精神的ないちじくの葉を作りたくなる、格好の的になっています。不安な人は、自分が何者かへの挑戦にいつでも反応します。安心している人は、相手にすらしません。

思い出すのは、ロットワイラーを連れた友人と歩いていたときのことです。私たちは、ずっと小さな犬を飼っている家の前を通りました。その小さな犬は吠えたて、走り回って、ロットワイラーの注意を引こうとします。ロットワイラーは、その小さな犬のほうへ首を向けることさえしませんでした。私には、小さな犬がこう言っているように思えました。「おいロットワイラーさん、相手になってやるぞ。おまえみたいな大きな犬にも勝てるって、飼い主に見せてやるんだ」。けれどもロットワイラーは自分が何者かに確信を持っていて、その挑発に応じもしませんでした。応じたところで、自分の値打ちに何が加わるでしょうか。

イエスが誘惑の荒野に入らなければならなかったのは、まさにこのためです。人類には、自分が神の子であることを、行いによって証明するのではなく、神がそう言われたという一事によって信じきる、そういう人が必要でした。世界には、私たちを罪に縛りつけ、悪魔の奴隷とす

る、あの無敵に見えるゴリアテ――無価値感――に立ち向かうダビデが必要だったのです。実際、荒野におけるキリストの誘惑の物語は、ダビデとゴリアテの物語と多くの点で似ています。

- 霊的存在であるサタンは、人間の性質を負われたイエスに対して、多くの点で有利でした（サムエル記上 17:33）。
- イエスは人類全体を代表しておられ、キリストの勝利は私たちの自由を意味しました。サタンが悪のすべての勢力を代表し、その勝利が私たちの永遠の奴隷状態を意味したのと同じです（サムエル記上 17:9）。
- ゴリアテが四十日間イスラエルをあざけったのと同じように、イエスは四十日間、荒野でサタンのあざけりと誘惑に向き合われました（サムエル記上 17:16）。
- サタンとゴリアテは自分の力で来ましたが、イエスとダビデは主の名によって来て、御父を現し、生ける神の軍勢に逆らった者を暴きました（サムエル記上 17:45）。
- イエスが用いられた武器は、世の基準では弱く見えました。この方は神の言葉に信頼し、その言葉を正確に用いて、サタンの心を暴かれたのです。

この対応は見事です。私は自分を、丘の斜面に立つイスラエルの兵士の一人として置いてみずにいられません。ゴリアテが私の神を、私の信仰を、そして私個人を侮辱するのを聞いているのです。「おまえの神はどこにいる。そんなに強いなら、なぜ私と戦わない。おまえは弱くて役立たずで、おまえの神の恥さらしだ」。この種の罵倒を四十日間聞かされれば、本当に気がめいってくるでしょう。それにあの体の大きさを見てください。日の光に鎧を光らせ、化け物のような声が谷じゅうに侮辱

を響かせます。状況は絶望的に見え、奴隷であることを受け入れるしかないという、沈み込む思いが広がります。

今日、それが何か違うでしょうか。私たちには、自分の無力さと弱さについてのサタンのあざけりがあります。その誘惑はあまりに強く、圧倒的に見え、私たちは何度も何度もそれに落ちます。そして、奴隷であることを受け入れるしかないという、あの沈み込む思いがあります。私たちの奴隷状態は決して打ち破られない、罪はつねに私たちに勝つと説く人さえいます。罪の奴隷状態への、なんと悲しい降伏でしょうか。ダビデの子は私たちの陣営におられ、私たちを悪魔の鎖から解き放ってくださいました。誘惑の荒野におけるこの方の勝利は、人類家族全体の勝利です。あなたはなお自分のゴリアテに立ち向かわなければならないと考えることもできます。あるいは、丘の斜面から畏れをもって見つめることもできます。イエスがあなたの誘惑の首をはねられるのを。イエスのゆえに、あなたはすでに勝利を得ていると信じるなら——救ってくださることを願うのではなく——あなたは信仰の核心そのものを見つけたのです。

ダビデの子が、無価値感の力から私を解き放ってくださったことを、私はこの上なくうれしく思います。この方は私の反逆と高慢の中心を取り除いてくださいました。この方は私の足を、神の子と認められているという固い岩の上に据えてくださいました。この方は私に代わって疑いに向き合い、御父の言葉への信仰によってそれを打ち破ってくださいました。神の息子たち娘たちよ、私とともに歌い、喜んでください。イエスはデュラセルの鎖を打ち砕き、私たちを愛する者において受け入れられる者としてくださったのです。

第 11 章　天の門が開かれる

一条の光が闇を裂き、夜明けが来たことを告げます。それは同時に、あの務めを始める時が来たことをも告げていました。旅の支度をしながら、脈は速くなり、息は浅くなります。夜明けの中へ歩き出すとき、アブラハムの心には思い出があふれてきます。初めてイサクを抱いたときのこと。長い年月の待望のあとに解き放たれた、あの大きな喜び。幼いイサクが父の寝床に飛び込んできて身を寄せ、アダムとエバやノアやそのほか多くの人々の話にじっと耳を傾けていたこと。それらの記憶が、これから果たすべき務めを思うアブラハムの肩に、鉛の重りのようにのしかかります。神はこう言われたのです。

> あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい。[48]
>
> 創世記 22:2

神は語られました。今アブラハムは、その命令に従うために、ありったけの力をかき集めます。説明はなく、理由も告げられず、ただ命令だけがあります。神とともに歩んできた年月の中で、アブラハムは神の命令に逆らわないことを学んでいました。神が最善をご存じであり、神の道こそ従うべき唯一の安全な道であると、信頼するようになっていたのです。けれどもこの道は険しく、考えることさえできないほど険しいものでした。

---

[48]訳注：「燔祭」とは、いけにえを祭壇の上で焼き尽くしてささげる、旧約時代のささげ物のことです。

アブラハムの心の中で荒れ狂う戦いを、誰が理解できるでしょうか。息子の代わりに自分がささげ物になれるなら、彼は喜んでそうしたでしょう。息子をこの運命から救うためなら、しないことは何一つありませんでした。アブラハムは激しく息をつきながら、自分の痛みをイサクから隠そうとします。これはすぐに消える悪夢に違いない。ところがイサクの問いが、現実を突きつけます。「父よ。火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」。矢がアブラハムの心を貫きました。何と答えればよいのか。知恵を求める素早い祈りが神に上り、そしてアブラハムは答えます。「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」[49]。

山の頂で、アブラハムは苦しみながら、神の命令をどう理解したかをイサクに明かします。イサクは若者で、父を組み伏せて逃げることもたやすくできたはずです。けれどもイサクは従順の訓練を身につけていて、自分の願いを父の知恵に明け渡します。全天が見つめる中、アブラハムは息子を、その尊い息子を、最後の瞬間のために整えます。人間の理性が信仰に対して次々と反論を放ちます。それでもアブラハムは、暴風の中の高い杉のように、たわみはしても、自分に求められたことをやり遂げるという決意を曲げませんでした[50]。

すべての備えが整い、アブラハムは息子を見下ろします。痛みが心を引き裂き、力が抜けていきます。それでも彼はしっかりと立ちます。祈りをささげ、最愛の息子のいのちを終わらせる刃を、突き立てようと心を定めます。

---

[49]創世記 22:7、8

[50]詳しくは fatheroflove.info にある『アガペー』第 24 章「アブラハムと荒らす憎むべきもの」を参照してください。

その瞬間、声が聞こえました。「アブラハムよ、わらべを手にかけてはならない。あなたが神を恐れる者であることを、わたしは今知った」。

この物語を思いめぐらすとき、私はアブラハムの立場に自分を、イサクの立場に自分の息子を置いてみずにいられません。彼が感じた張りつめた思いを、どうにか理解しようとします。けれどもその絵は、途中で止まってしまいます。心の奥深くから何かが伸びてきて、その像を完成させることを禁じるのです。私の心は、そんな場面に耐えられません。

十字架におけるイエスの恐ろしさと犠牲とをつかむためには、御父と御子との関係の深さを、垣間見る必要があります。二人の王国の本質そのものが、二人のあいだにかたどられています。二人の生き方の核は、互いへの愛の中に現されているのです。この関係という次元を十字架に加えないなら、私たちは本当に要点を見失っています。

> 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。
>
> ヨハネによる福音書 3:16

尊い関係が断ち切られることは、人が経験しうる最も打ちのめされる出来事です。愛する人から引き離されるという思いは、あらゆる人間の魂の奥にひそむ恐れです。講演のために一週間家族から離れているだけでも、私の心は愛する者たちのいる家へ帰りたくてたまらなくなります。この世に、家族との関係と引き換えにしてよいものなど何一つありません。考えるだけでも胸が悪くなります。それなのに、聖書に現された神の心をのぞき込むとき、私たちはこう知るのです。父なる神は、御子を永遠に失う危険を進んで冒してくださった。ただ、あなたと私が天

の門をくぐり、造り主とその御子のもとへ帰れるようにするためだけに。

こう言う人がいるかもしれません。「そうは言っても、イエスはご自分がよみがえって御父と再会されることを知っておられたのだから、それほどひどくはなかったはずだ」。イエスはそれを信仰によって信じておられました。墓の門の向こうを見通すことはできなかったからです。使命に失敗するかもしれないという危険の要素が、そこにはありました。反逆する世の罪責が御子の上にのしかかり、罪の赦しに対する私たち人間の不信によって御父の愛が覆い隠されたとき、イエスは、永遠にわたってご自分の喜びであったあの愛に満ちた顔を求めて、闇の中を探されました。けれども罪が御父の顔を隠し、イエスは御父から完全に切り離されたと感じられたのです。希望は飲み込まれ、待っているのは死だけでした。愛する方から永遠に断たれるのではないかという誘惑の中で、それでも信仰が叫びました。「わたしは、わが魂をみ手にゆだねます」[51]。イエスの信仰は、これほど圧倒的な状況の中で勝利したのです。

神は御子を見捨てられたのではありません。けれども私たちの罪の重みが御子の上にのしかかり、罪人が罪責のゆえに感じるものを、御子に感じさせたのです。第 9 章で、私たちはカインが叫んだ言葉を読みました。「わたしの罰は重くて負いきれません」。キリストは私たちのために、これを十字架の上で負ってくださいました。私たちの罪は、神が私たちに敵対し、罪のゆえに私たちを殺そうとさえしておられる、と私たちに感じさせます。けれども神は私たちへの愛を示し、私たちが赦され

[51]詩篇 31:5

ると信じられるように、御子がこの経験を通り抜けることを許されたのです。

このすべてが、一つの問いを呼び起こします。神は、ご自分と私たちとのあいだの壁を取り壊すことについて、どれほど本気なのでしょうか。アブラハムとイサクの物語の中に、私たちは神と御子の姿を見ます。アブラハムと同じように、神がアブラハムに息子を殺させたいと思われた、と考えるのは自然なことです。神はアブラハムに息子をささげよと告げられ、アブラハムはそれを、殺すことだと理解しました。それが罪に対する義についての、私たち人間の受け取り方を映しているからです。神がアブラハムを止められたという事実は、それが神の願いではなかったことを示しています。それでもその過程で、アブラハムは、自分の大切な望みのすべてを神に明け渡そうとする信仰を現しました。神が身代わりとして雄羊をアブラハムに備えられたとき、私たちはそこに、義についての人間の受け取り方に対して神が身代わりを備えられたことを見ます。神は、私たちが自分の罪は赦されていると信じられるようにするために、御子がご自分から引き離されることを許されたのです。

私たちの罪のゆえに、かつて存在した最も大いなる愛が砕かれ断たれた、あの恐ろしい日の地震と暗闇の中に、私は御父の叫びを聞きます。「わが子よ、わが子よ、どうしてあなたを渡すことができようか。どうしてあなたを手放すことができようか」。ここにこそ地獄があります。御父も御子も、私たちのために、その関係が断たれるという意味での地獄を経験されたのです。二人は、払われなければならないと私たちが理解していた代価を、払ってくださいました。神の王国が立つものの正反対――愛に満ちた親密な関係の正反対――以外に、地獄の本質が何でありうるでしょうか。

では、これは私たちにとって何を意味するのでしょうか。それは、神の御子が私たちに代わって、神の愛から引き離される恐怖を味わってくださったということです。だから私たちは、それを経験しなくてよいのです。「死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」[52]。イエスと御父が私たちのためにしてくださったことのゆえに、今や何ものも私たちを神の愛から引き離すことはできません。いけにえもささげ物も、神が求められたものではありませんでした。けれども私たちが赦されうると知るために、神は究極の代価を払われたのです。

神の御子が地獄の押しつぶす重みを経験してその門を閉ざしてくださったので、天の門は私たちのために開かれます。私たちがそこへ入り、泣き叫び歯がみすることを経験する必要は、決してありません。それは、イエスが私たちのためにしてくださったことを拒み、神の愛から永久に自分を断ち切る人々に起こることなのです。

今、私たちに残されている挑戦は、心の中でその旅路を進むことです。自分には値打ちがない、反抗的で意地になっていると感じている状態から——自分のすることでアイデンティティを刻もうとしている状態から——いのちの源へ戻る旅です。そこには愛が私たちを待っており、私たちは自分が神の愛する子であることを知るのです。イエスが天の門を開いてくださったとはいえ、私たちはデュラセルの王国から神の王国へ、達成によるアイデンティティから子であることによるアイデンティティへ、言いかえれば行いによる救いから信仰による救いへと、旅をしなければなりません。本書の残りは、この旅の困難と特権とに当てられます。

---

[52]コリント人への第一の手紙 15:55

第３部　子であることへの帰り道

第 12 章　デュラセルで動く人生

会場には期待の空気が漂っています。私は同級生たちと講堂に座り、聞き覚えのある名前が読み上げられるのを待ちわびていました。その年、私は勉強に打ち込んでいました。たいしたことではないと自分に言い聞かせながらも、心の奥ではその願いが大きくなっていたのです。

学校は、その年の成果に対してさまざまな賞を生徒に渡していました。この行事のあいだ、私はとても興味深い小さな心の遊びをします。「今年はよく頑張った。次の賞はもらえるかもしれない……いや、誰かほかの人が取るだろう……でも、可能性はある」。名前が読み上げられる瞬間が近づくと、期待に胸が高鳴ります。そして名前が聞こえます。私の名前ではなく、友人の一人の名前でした。

興味深いのはここからです。外側では、私は友人とその成功に拍手を送っています。ところが内側では、まったく別のことが起きています。「なぜあいつが取ったんだ。僕のほうが頑張ったのに。あれを彼にやるなんて信じられない。ああ、そうか、理由がわかった。あいつは先生の一人と親戚なんだ。だから選ばれたんだ。結果が仕組まれていたのさ。何を知っているかじゃない、誰を知っているかだ」。そのあいだじゅう、私は拍手し、微笑み、落ち着いて見えるように努めています。やがて雲がわいてきて、その後の数時間、私は少し落ち込み、少し腹を立てています。デュラセルで動く人生の、いつもの一日です。

価値を認められ、受け入れられたいなら、仲間の中で一番にならなければならない。子どもがそれを見抜くのに、時間はかかりません。比較の世界へようこそ。子どもの一人には誕生日に何かを買ってやり、その

きょうだいには何も買わなかった、という罠に落ちたことはないでしょうか。たいていは家じゅうが大騒ぎになり、もらえなかった子は涙と叫び、ときには癇癪をまじえて「ずるい」という言葉をおうむ返しにします。そして公園での「見て見て」競争があります。あなたはすべり台にいる一人の子を見ていて、その子が滑り下りるのに微笑みます。すると背後から「見て見て」という声。振り向くと、もう一人の子がブランコをこいでいます。あなたが別のことに注意を向けると、子どもがそれに気づいて「見て見て」と叫びます。そこから機関銃のように「見て見て」が連射され、一つひとつが音量と激しさを増していきます。それからお昼になって席につき、さあ食べようというとき、この愛らしい小さな歌が聞こえてきます。「あの子のほうが多い、ずるい、もっとほしい」。これがデュラセルで動く人生の本質です。年をとるにつれて、私たちはもう少し洗練された形を取ろうとします。けれども比較と関心を求める心とが、人間の営みの中心にあるのです。

たいていの学校の教育課程は、この比較と関心欲求の必要をよく理解しているように見えます。家庭のぬくもりから引き離され、同年代の集団の中に押し込められることは、デュラセルの原則を埋め込むのに完璧な培養土となります。それからの 12 年間は、いくつかの分野の一つ以上で、比較のうえで抜きん出るための競走です。そうして明るく幸せな未来を確保するのです。

たいていの文化は、より知的な者を優遇するようです。比較のうえでの知能は、あなたを遠くまで運んでくれる資産です。知識を蓄えて吐き出す力のある子どもが、手先の器用さに恵まれた子どもよりも高く評価

されがちなのは、なぜなのか、考えたことはありませんか[53]。庭の手入れがとても上手だから、あるいはエンジンの修理ができるから大学に入れる、という光景を想像できるでしょうか。そうした技能を持つ人にも場所はあります。けれども運命は、学問に長けた者を山の頂に置きたがるようです。

毎年毎年、子どもたちは通知表を家に持ち帰り、その通知表にもとづいて自分についての見方を作り上げていきます。私はこれまで、手先には恵まれているのに学業では苦労した人を、何人も見てきました。その結果、そうした人はしばしば自分にこう線を引くようになります。「それは自分には無理だ」「そんなことは絶対にできない」、あるいはあからさまに「自分は頭が悪いから」。

けれども心配はいりません。成功する道はほかにもあります。どの学校制度にもスポーツの課程があり、子どもたちは運動能力という比較の物差しを育てられます。子どもたちは何千時間もかけて運動の技能を磨きます。いつの日か、それが憧れの力と栄光をもたらしてくれるようにと。スポーツはしょせん遊びだ、と私たちは言います。それを、ワールドカップの期間にヨーロッパの街で暴れ回るイングランドのサッカーファンに言ってみてください。あるいは、愛するクリケットの代表がワールドカップで負けていくのを見ていた男性はどうでしょう。彼は心臓の発作を起こし、試合の終わる前に亡くなりました。そして、革の球を蹴って二本の棒のあいだに通そうとするだけで、なぜ選手が年に何億円も受け取れるのでしょうか。スポーツは真剣な仕事です。達成によっ

[53]西洋文化は、実際的というより学問的な傾向を持っていたギリシャ文化に、多くを負っています。ヨハネの黙示録 13 章で、全世界を導くと描かれている獣が、まず何よりもギリシャの王国を表すひょうであったのは、偶然ではありません。

て値打ちを得、望みうるかぎりの注目を集める、最も単純な手立ての一つを提供するからです。デュラセルに餌を与え、達成ではなく関係によって価値を認められうるという信仰を殺すのに、これほどよくできた仕組みはありません。

スポーツについて興味深いのは、最高の水準で戦っても、二位に終われば誰もあなたの名前を覚えていない、ということです。負けることの心の傷は、打ちのめすほどのものになりえます。私は、PK 戦での失敗によって、チームが憧れのトロフィーを逃した一人のサッカー選手が、地面にくずおれて赤子のように泣きじゃくるのを見たことがあります。監督が彼を支えてピッチから連れ出していくのを見ながら、私は思いました。あの瞬間、彼は自分にどれだけの値打ちがあると感じていたのだろうか、と。もちろん、それはただの試合です。そう、けれどもそれは、価値と受容をめぐる生死の闘いである試合なのです。

私たちは、好意を示して望みどおりの成功と幸福を与えてくれるようにと願う、ほかの神々をいくらでも並べることができます。肉体の美しさという領域があります。頬骨の形や胸の大きさによって名声が得られたり失われたりする、容赦のない世界です。基準に届かないと感じて、夜ごと泣きながら眠りについた若い女性を、あなたはどれだけ知っているでしょうか。近年では拒食症と呼ばれる問題が急速に増えていて、おもに女性たちを、ありえないほど細い体型まで自分を飢えさせることへと駆り立てています。

富を作ることや、職の地位、住む地域の格はどうでしょうか。私は何年か事務職の企業社会で働きましたが、その序列を観察するのはなかなか興味深いものです。人の地位は、机や椅子の種類と質でわかります。いちばん上の役員には、階下の通りを見下ろす窓のついた個室があります。肘掛けのついた、背の高い革張りの椅子に座っています。染色され

た木製の大きな机には、最新のパソコンが載っています。その次の人も個室を持っていますが、窓からの眺めは少し劣り、椅子も少し見劣りし、パソコンも少し遅い。その次の人は、間仕切りされた区画があるだけで、椅子に肘掛けはありません。ああ、ハンズフリーの電話もありませんし、窓の外を見ることもできません。考えてみればおかしなものです。けれども企業社会では、これはきわめて真剣な問題です。事務用家具は、仲間と自分を効果的に比較するための、大切な一部なのです。

デュラセルの世界で比較の機会は尽きませんが、たいていは次のいくつかの基本的な分類のどれかに収まります。

1. 学歴
2. 運動能力
3. 音楽・芸術の才能
4. 職の地位・収入
5. 容姿
6. 持ち物・資産
7. 国籍

これらこそ、世が礼拝し、好意を寄せてくれることを願っている神々です。この神々は厳しい主人であり、好意を得たいと望むなら、たいていは全面的な服従を要求します。家族と友人をいけにえにすることを求めるのが常であり、運がよければ、無の中へ消えていく前に、栄光の一瞬を味わえるかもしれません。私たちは皆、デュラセルの力によってこの神々の奴隷となります。そして天と地を造られた神が、私たちを救い出そうとしておられるのは、この神々からなのです。

第 13 章　天への階段

日はしだいに短く、冷たくなっていました。冬が近づいています。この幸せな小さな谷にまもなく降りてくる、身を切る寒さに備えて、薪を積み上げる季節でした。その家の主人が忙しく薪を割っていると、視界の隅に小さな靴が入りました。顔を上げると、少年が一人、彼の一挙一動を見つめています。「僕のお父さんは、もっと速く薪を割れるよ」。「そうかい」。少年の大胆さが面白くて、男は答えました。「本当だよ。僕のお父さんは何でもできるんだ。世界でいちばんなんだよ」。「そんなお父さんがいるなんて、君は幸せ者だね」。

私の子ども時代は、こんなふうに単純なものでした。お父さんとお母さんは決して間違わず、想像しうるかぎり最高の人でした。ある意味では、その単純な状態にとどまれたらよかったのですが、そうはいきませんでした。学校に上がってしばらくすると、私は絶え間ない比較の繰り返しに順応しはじめ、学びをともにする子どもたちの小さな共同体の中で、自分の居場所を探すようになりました。小学校のあいだは比較もそれほど激しくはなく、初期の学校生活の多くを、私は懐かしい思い出として覚えています。工作や遊びや活動がたくさんあって、おおむねとても楽しいものでした。けれども、未来が先取りされて現れる時があり、私はデュラセル王国の甘く苦い味を経験することになりました。

七歳のとき、家族が新しい土地へ引っ越し、私はまもなく新しい子どもたちの集団の中で手探りを始めました。すぐに友だちはできましたが、意地の悪い相手にも出会いました。私は子どものころ、かなりがっしりした体つきで、痩せた子が二人、自分たちより少し肉づきのいい私をだしにして楽しむことに決めたのです。

「デブ」「まんまる」「のろま」。覚えているのはそんな名前です。私たちの多くが子ども時代に出会う、ひどい経験でした。それが来る日も来る日も続きました。魂の敵は、私の値打ちの感覚を壊すために、この少年たちを使っていたのです。ある朝、学校へ向かう車の中で、私はもう限界だと決めました。「お母さん、車から降りない。学校には行かない」。「もちろん行くのよ」。「行かない」。学校に着くと、あの脅すような二人が、獲物を狙うハゲタカのように待っているのが見えました。母がドアを開け、私を引っぱり出そうとします。そこからの数分間は、なかなか激しいものでした。私は蹴り、抗議し、叫び、座席にしがみつきました。これは、よくいる行儀の悪い男の子の話にすぎないでしょうか。そうかもしれません。けれども、一人の人間としての自分のアイデンティティが押しつぶされようとしていたとき、私は自分を救うために必死の手段に訴えようとしていたのです。そのあと何が起こったかは、実は覚えていません。ただ、いじめが止んだことは覚えています。ここに、これから先に待っているものの、本当の味わいがありました。

子どもに現れる残酷さは、サタンの比較の王国の原則が、そのまま手加減なしに働いた結果です。子どもが見せる厚かましい身勝手さと忘恩に、私たちはしばしば呆然と立ち尽くします。私たちは自然にこうした性質から抜け出すのでしょうか。いいえ。すでに学んだとおり、ダビデの子の助けなしに、この王国から出ていける人は一人もいません。年をとるにつれて、私たちはただ、もっと狡猾に、もっと洗練されていくだけです。

高校の半ばに達するころには、私はすっかりプログラムされていました。私は学歴の神を、スポーツの神を、そして容姿の神を礼拝することを学んでいました。お金の神も礼拝したかったのですが、仕事がありま

せんでした。まわりのすべてが、一番になるために努力せよ、達成するために努力せよと私に告げていました。私は、勝者だけが受け入れられ、敗者には何の値打ちもないと学びました。学校でよい成績を取ろうという動機は、学んでいる内容そのものを楽しむことよりも、一位になれるかもしれないという可能性から来ていることが、何度もありました。テレビで見る映画も、この考えを補強しました。主演の男優は、何か大きなことを成し遂げ、それによって若い女性の心を溶かす者として描かれます。これが私に教えたのは、関係とは達成するものであり、若い女性は友人というより賞品のようなものだ、ということでした。もちろん、そんなふうに口に出したりはしません。すべては意識の下で起こっていたのです。

夢を見る時期でもありました。私はよくベッドに横になって、クリケットの試合でオーストラリアのために決勝点を打つ夢を、あるいは最後のゴールを決める夢を、あるいは命がけで危機に陥った乙女を救う夢を見ました。こうした夢が、私の価値観の織り目になっていきました。

夢を見れば見るほど、その目標を達成しようという決意は固くなりました。厄介なのは、こうした目標が真空の中では達成できないことです。私は他人に勝たなければなりませんでした。友だちはほしい。けれども夢のほうが先です。夢が脅かされていないときは礼儀正しくいられました。けれども夢が挑戦されていると感じたとたん、それは戦争でした。

私は目標の達成に打ち込みました。スポーツと勉強では抜きん出ました。三つのうち二つなら、悪くないでしょう。それから私は別の段階に入りはじめました。ひとたび頂上に着いたら、今度はそこにとどまろうとしなければなりません。絶えず背後を振り返り、大切な地位を守るのです。そこに評判への期待が加わります。ひとたび評判を築いてしまっ

たら、もし出来が悪かったらどうなるのか。それは恐ろしいことなので、私はいっそう、落ちるまいと躍起になりました。

この戦いはしばらく荒れ狂いましたが、やがて私は、目標をすべて達成することはほとんど不可能だと悟りはじめました。それが怒りの爆発につながりました。裏切られたと感じていたのだと思います。私は主人たちによく仕えてきたのに、今その主人たちは私をあざけっている。私は、持続する値打ちの感覚を決して与えられない仕組みの中で訓練されてきた。だから私は怒っていたのです。

多くの人が、若い人たちがしばしば見せる不安定さと破壊性を、そしてなぜその多くが自殺したり、大量の飲酒や薬物に走ったりするのかを、理解しかねています。私はそれが多くの場合、教えられてきた方法では自分の夢に決してたどり着けないと悟るからだと思います。他人の目に偉大な者となることは決してない。だから自分を壊すのです。

あるとき、バスケットボールの試合に出ていました。試合は接戦で、緊張が高まっていました。私がマークしていた相手が突然ゴールへ切り込み、ボールを持ち上げた瞬間、私は手を伸ばして、きれいにボールだけをはたき落としました。ところが信じられないことに、審判の笛が鳴り、「ファウル」の声が聞こえたのです。相手に触れていないことは自分でわかっていました。そのとき突然、この怒りが内側から込み上げてきました。世界を約束しておきながら何一つ与えなかった、この惨めな仕組みへの怒りです。私は審判に詰め寄り、顔から 5 センチのところに立って、ひどい大声で怒鳴りつけました。私の中で何かが切れ、私は何も抑えていませんでした。私はただちにコートから退場させられ、大会からも追放されました。歩いて出ていきながら、私は神が私に語りかけてくださったと思っています。私は自分に問いました。「おまえ、いったいどうしたんだ。さっきは完全に我を失っていた。自分を制御できな

くなっている」。自分をきちんと見つめ、自分が向かっている方向を問うたのは、それが初めてでした。神は私を、もっと良いものを探すようにと引き寄せておられました。もっと良い道があるはずだと、私は感じはじめました。

私の魂の敵もこれに気づき、自分を証明しようとする方向へ、私をいっそう深く追い込もうとしました。禁煙すべき時が来たと感じた喫煙者が、かえって二倍のたばこを吸いはじめるのと同じです。夢が薄れていくにつれて私は引きこもるようになり、かなり気難しくなりました。ある日、母が私の部屋に入ってきて、そのひどい有様について小言を言いはじめました。まあ、たいていの十代の男の子の部屋がそうであるように、最良の状態とは言えなかったのです。私は、母が自分の場所に入ってきて指図することに腹を立てました。私は口の中でいくつかの言葉を吐き出し、放っておいてくれと母に言いました。

神が人に届く道の多様さは、興味深いものです。友人の多くは、母親のことをひどく見下した言葉で語っていました。けれども私の父は、どういうわけか、両親への敬意というものを私に教えることに成功していました。そして私は、友人の何人かのような言い方で母のことを語るまいと誓っていたのです。母についてあの言葉を口にしたとき、それは私に残された最後の尊厳がはぎ取られたようなものでした。自分がそんなことを言うとは思いもよらず、私は衝撃を受け、落ち込みはいっそう深まりました。私はもうどうでもいいという地点に近づいていました。それはとても危険な場所です。

私は、自分が分かれ道に来ているという確かな感覚を持ちました。広い道が、酒と女と歌に満ちた大きな口を開けて、私を招いています。もう一方には、聖書が示す狭い道がありました。両親が教えてくれた信仰に従うのか、それとも燃える彗星のように広い道へ飛び込むのか。もう

クリスチャンのふりをする意味はないと、私にはわかっていました。キリスト教的な環境で育てられたにもかかわらず、自分がクリスチャンではなく、本当は一度もそうであったことがない、ということが、今ははっきりしていました。キリストか、悪魔か。どちらかです。ありがたいことに、私は聖書の本当のイエスを見つけようとする道を選びました。

私は、家に何年も置かれていた一冊の本を読むことにしました。『キリストへの道』という本です[54]。その題は、今の私の必要にぴったりだと思えました。私はこの方を見つけたいという飢えと必死さをもって、読みはじめました。天への階段を見つけなければならなかったのです。私はもう、サタンの王国に耐えられませんでした。

本の初めのほうで、著者はこう説明していました。イエスは、人類が神について受け入れてきた嘘を打ち払うために来られた。そして神が本当に私たちを愛しておられることを示すために来られた、と。私はその言葉を、夏の雨を受ける乾ききった大地のように飲み込みました。著者は私に、ゲツセマネの園のイエスを思い、十字架までこの方についていくようにと招きました。

その場面を思い描いているうちに、私は突然、自分が実際にそこに立ってこの方を見つめているように感じました。十字架の上の姿はとても現実的に見え、私は強い印象を受けました。この方がそこに架かっておられるのは、私を愛しておられるからであり、サタンの王国から逃れたいという私の必死の必要を理解しておられるからだ、と。私はこの方を最良の友として信頼でき、この方が私を天の王国へ導いてくださる、

---

[54]訳注：エレン・G・ホワイト著『キリストへの道』（Steps to Christ）。日本語版も出ています。

という思いを受け取りました。そこにおられるこの方を見つめながら、この方が私を救うことを望んでおられるという、はかりしれない感謝を覚えました。そして何年も背負ってきた罪責と、不安と、落ち込みと、恐れの重みが、背中からすべり落ちていくのを感じました。かつて感じたことのない平安が私の心に入ってきて、それから私は、喜びのために泣きに泣きました。ダビデの子が私の闇を突き破り、真昼の光でそれを貫いてくださったのです。

第 14 章　同じ神々、違う名前

部屋は活気と笑いと音楽と、若い興奮とに満ちていました。部屋の前のほうには大きなスピーカーが二つ置かれ、最新のロックバンドの音楽を鳴らしています。私は友人たちと祝おうとパーティーを企画していました。少なくとも、そのつもりでした。私は部屋の隅に座りました。そこでは一人の若者が身ぶりをまじえて、最新の映画の場面を語っています。私は腰を落ち着けて、その雰囲気に浸ろうとしました。けれども、何かがしっくりきません。立ち上がって裏のテラスへ出て、憧れの女性を射止めた最近の武勇伝を語り合っている若い「ロミオ」たちに加わりました。いいえ、これも楽しめませんでした。いったい自分はどうしてしまったのか。音楽が神経に障りはじめます。部屋の向こうに目をやると、流れている映像の中に、私にはとても不快な場面が見えました。その思いが貨物列車のように私を打ちました。私はこういうものが大嫌いだ。

頭の中で、ありうる筋書きが次々に加速していきます。今までこれが私にとっての「楽しみ」の定義でした。それを今、私はもう欲しくないのです。何かが私の心をつかんでしまい、これを楽しむことを不可能にしていました。どこか深い淵から、恐ろしい思いが浮かんできました。私の楽しい人生は終わってしまった、私はもう二度と楽しむことができないのだ、と。私は家の前へ駆け出し、前庭の芝生の上で拳を空へ突き上げて叫びました。「あなたは私の人生をめちゃくちゃにした」。

イエスとの「ダマスコ途上の経験」から、数週間が経ったころでした。私の人生はひっくり返っていました。あれほどの平安を感じたことはなく、聖書が生き生きと語りはじめていました。私はそのすべてを飲

み込み、知らなかった自由を味わっていました。イエスが私の人生に入ってこられたとき、変化はただちに現れました。突然、自分の言葉づかいの一部がふさわしくないこと、冗談のいくつかがかなり下品であること、そして生活のある部分が、今向かっている新しい方向とは相容れないことに、気づくようになりました。私は新しい王国への旅の途上にいました。まったく異なる国へ行って、言葉と習慣を一から学ぶようなものです。学びたいと思ったのは、その王国の主を愛していたからです。けれども私は別の王国で教育を受けてきたので、慣れるにはしばらく時間がかかるはずでした。

どれほど根本的な変化が起きているのかに気づいたのは、あのパーティーの夜でした。イエスが愛によって私の心を捉えてくださって以来、この方が呼ばれるとき、私はそれに逆らえませんでした。ですからパーティーの夜、これでよいと思っていたことをしていた私は、この方が私をそういう生き方から呼び出しておられるのを感じ取れたのです。ほかの生き方を何も知らなかったので、私は、それに代わるものが今より良くないのではないかと恐れました。正しいとわかっていても、知らないものを恐れるのは、とても簡単なことです。ありがたいことに、私はイエスが面倒を見てくださると信頼するほうを選びました。自分の気持ちより、この方を信頼するほうが良いのです。

イエスを救い主として受け入れたとき、私は何週間も宙に浮いているようでした。この方との特別な近さを感じ、それは今日まで私とともにあります。イエスは私のために天の門を開いてくださいました。けれども今度は、デュラセルの種を取り除く手助けをしてくださるのです。この方は、私の業績と達成を私の価値の中心に据える、あの人生哲学を根こそぎにする助けを始められました。それはアダムのすべての子が通らなければならない旅です。私たちがそれをやり遂げる唯一の道は、目を

十字架の光に据えつづけ、へりくだって救い主の足跡をたどり、新しい王国の原則の中へ入っていくことです。

私は友人たちと祈祷会に出るようになりました。最初の晩、ともにひざまずいたとき、私は神の甘い霊が私たちを包んでいるのを感じました。けれども同時に、古い生活から来たもう一つの霊が、私を悩ませていました。順番に祈っていく中で、ある思いが私を打ちました。「僕はこの人たちのようには祈れない。みんなあんなに言葉が達者だ」。私の心はこの思いに縛りつけられ、祈りの輪が近づいてくるにつれて、鼓動が速くなっていきます。もうすぐ私に光が当たり、みんなが私の言葉を聞くのです。でも待ってください。これはイエスについての祈祷会であって、私についての会ではないはずです。

ここにデュラセルの呪いがあります。私はイエスに心をささげ、この方に従おうとしていました。それでも古い生活の原則は、私を引き戻す用意を整えていたのです。すべての中心に自分を据えさせ、祈りにおける神との関係ではなく、祈りにおける自分の出来ばえを問題にさせようとして。

聖書を学びはじめたころ、私はしばしば自分が足りないと感じました。キリスト教的な環境で育ったにもかかわらず、聖書という点では幼稚園も卒業していないと気づいたからです。教えられることを聞くのは大好きでしたが、心の奥で何かが私をつつきつづけました。「どうしてあの人たちは、あんなに簡単に聖句を開けるんだろう。自分には絶対にできない」。私は正しい書と節を探してもたつきながら、どうか自分が最後になりませんようにと祈っていました。最後になれば、みんなを待たせることになります。恥ずかしいことです。他人と自分を比べるという何年もの訓練が、新しいクリスチャンの旅の中で頭をもたげはじめたのです。キリストの霊が私の言葉づかいや生活について私に語りかける

のは、かなり簡単なことでした。けれども、デュラセルの触手がどれほど深く根を張っているかを悟るには、時間が必要でした。

旅を続けるうちに、私は聖書への深い愛を育てていきました。それは、私のためにいのちを与えてくださった英雄について学ぶ、最良の方法の一つでした。私はイエスについて学ぶことが大好きで、それは大きな祝福でした。けれども古い生活は、私を罠にかけようと物陰にひそんでいました。私は、まわりの人たちが聖書のことについて自分よりずっと知識が少ないことに気づきはじめました。聖書の知識が増えるにつれて、話す自信も増し、やがて私は小さな集まりで、そして大きな集まりで、聖書研究を導くようになりました。これもまた、私にとっても周囲の人にとっても大きな祝福でした。けれども私はゆっくりと、着実に、関係による価値ではなく、業績による価値という土台の上へ戻っていました。それはゆっくりと、気づかれないうちに起こります。けれども、確かに起こるのです。振り返ってみて私が思うのは、私たちの多くにとって、神々は同じで、名前だけが違うのだ、ということです。

下の表を見てください。聖書を信じながら世のように生きることが、いかにたやすいかがわかります。荒れた生活を送るという意味ではありません。自分のすることによって価値を得る、という意味です。

世において	教会において
学歴	聖書の知識
運動能力	人前で話す力
芸術の才能	音楽奉仕
職の地位	教会の役職
持ち物	霊の賜物
容姿	教会でのよそおい

私たちの多くにとって、イエスとの歩みはデュラセルの陰湿な力に乗っ取られています。今日の教会を見わたすと、私たちが世で逃れようとした神々が、教会の中で私たちを見つけ出したのがわかります。神々は光の衣をまとい、私たちはそれを良き友として受け入れてしまいました。その避けがたい結果が、教会の中の怒りと苦々しさと争いです。教会で敬虔に見せることは、とてもたやすい。けれども、あなたが陰で言ったことが伝わってしまったせいで、教会の反対側に座って口をきいてくれない人については、どうでしょうか。演奏が水準以下だと言われて、別の教会へ移ってしまったピアニストについては、どうでしょうか。自分たちの正統の定義に同意しない人を教会から追い出そうと、教会の中を行き来して探し回る「教理警察」については、どうでしょうか。礼拝委員会を乗っ取り、新しい礼拝様式を全員に押しつけようとし、それを好まない人はお気の毒、とする「進歩派」については、どうでしょうか。数え上げればきりがありません。そして私たちの魂の大敵は知っているのです。私たちをこの曲に合わせて踊らせておけるかぎり、私たちは本質的に、なお彼の王国の民なのだ、と。

私たちがなおサタンの王国の原則によって不自由にされている、その最も強い証拠は、教会における一致の乏しさと、キリストの愛の欠如です。もし私たちが自分の関係を、神がご自分の関係を大切にされるように大切にするなら、教会にはもっと多くの愛があり、互いへの接し方にもっと多くの心配りがあるはずです。

とても興味深いのは、この、世から教会への神々のひそかな移し替えが、私たち個人の経験の中だけでなく、教会全体の経験の中でも起こってきた、ということです。四世紀に皇帝コンスタンティヌスがキリスト

教を「受け入れた」とき、キリスト教会にはさまざまな変化が起こりました。とりわけ興味深いのは、パンテオンにあった異教の神々の像の多くが、キリスト教会へ移され、その名前がモーセ、ダビデ、ペテロといった聖書の人物に変えられたことです。同じ神々、違う名前です。どう装おうと、それは依然として異教です。では、今日については何と言えるでしょうか。使徒的な真理から離れた背教について、教会全体を批判するのは一つのことです。けれども、同じ原則が自分自身の生活の中で働いているのを見るのは、また別のことです。兄弟の目のちりを取り除こうとする前に、自分の目の梁を扱いましょう。

キリストの最も熱心な従者たち——弟子たち——の旅をたどるのは興味深いことです。力と地位の問題が、しばしば頭をもたげました。いくつかの聖句に目を留めましょう。

> そのとき、弟子たちがイエスのもとにきて言った、「いったい、天国ではだれがいちばん偉いのですか」。
>
> マタイによる福音書 18:1

弟子たちがこの問いを発した理由は、ただ一つ、自己中心です。弟子たちはイエスをメシヤ、キリストと信じていました。その信仰に胸を躍らせ、情熱を注いでいました。中には、この方のために死ぬ覚悟のある者さえいました。けれどもちょうど、祈ろうと備えていた私の心が、関係から自分の出来ばえへ移っていったように、弟子たちはメシヤとの関係から、その新しい王国における自分の地位へと移っていったのです。

> さて、ゼベダイの子ヤコブとヨハネとがイエスのもとにきて言った、「先生、わたしたちがお頼みすることは、なんでもかなえてくださるようにお願いします」。(36) イエスは彼らに「何をしてほしいと、願うのか」と言われた。(37) すると彼らは言った、「栄

光をお受けになるとき、ひとりをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」。

マルコによる福音書 10:35-37

地位と身分の神が、ヤコブとヨハネが学びつつあった新しい王国の原則を、すっかり覆ってしまっていました。だから二人は、あなたの王国で右と左に座らせてくださいと、イエスに願ったのです。ありがたいことに、イエスは、古い王国の原則を手放せない弟子たちの絶え間ない失敗に、飽きることがありませんでした。サタンの王国の原則がどれほど深く根を張っているかを私たちが理解するには時間がかかることを、この方はご存じだったのです。私たちが直面する問題は、古い原則が支配することを許すと、次のようなことが起こる、ということです。

十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネとのことで憤慨し出した。

マルコによる福音書 10:41

古い王国の原則に支配されることを許すとき、結果はいつでも争いです。ヤコブとヨハネのしたことは、ほかの弟子たちを怒らせました。なぜでしょう。二人がこういう合図を送っていたからです。「私たちはあなたがたより上だ」。二人にそのつもりはなかったかもしれません。けれども結果は、ほとんどいつもそうなります。イエスはこの機会を用いて、神の王国が彼らの育ってきた王国とどう違うのかについて、その理解を広げようとされました。彼らは違う考え方を学ばなければならなかったのです。

そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた、「あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。(43)

しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、(44) あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。(45) 人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。

マルコによる福音書 10:42-45

この言葉を、いつまでも私たちの耳に響かせておきましょう。神の王国で偉くなりたいなら、人を操り支配することではなく、人に仕えることを楽しむようになりなさい。イエスは、異邦人が他人の上に君臨し、権威をふるって誰が主人かを見せつけることを喜ぶ、と告げておられます。奇妙なことに、この同じ霊がしばしば教会を支配し、さまざまな人が自分の意志と権威を教会に押しつけようとします。十字架から二千年が経ちながら、私たちの多くは、いまだに基本を理解していないのです。

なぜ私たちの魂の敵は、これほどたやすく私たちを古い考え方へ引き戻せるのでしょうか。すでに述べたとおり、自分を証明せよとサタンが誘惑することを容易にしているのは、私たちの深い不安です。自分の価値がどこから来るのかを覚えていないかぎり、自分は意味ある存在だと証明するために石をパンに変えようとすることに、私たちは抵抗できません。

このデュラセルの原則が私たちにしつこくまとわりつくことについて、私には非常に驚かされることがあります。イエスは、この世界がこれまで見た中で最高の教師でした。三年以上を弟子たちとともに過ごし、天の王国についてできるかぎりのことを教えられました。それなの

に、そのすべてののちに、十字架にかけられるまさにその夜、弟子たちがなお古い生活の原則に支配されていたことを、私たちは見るのです。

> 食事ののち、杯も同じ様にして言われた、「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である。(21) しかし、そこに、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に食卓に手を置いている。(22) 人の子は定められたとおりに、去って行く。しかし人の子を裏切るその人は、わざわいである」。(23) 弟子たちは、自分たちのうちだれが、そんな事をしようとしているのだろうと、互に論じはじめた。(24) それから、自分たちの中でだれがいちばん偉いだろうかと言って、争論が彼らの間に起った。
>
> ルカによる福音書 22:20-24

宇宙がこれまでに見た最も偉大な愛の証明の、まさにその前夜に、イエスに最も近く、誰よりもこの方の王国を知っていた者たちが、自分たちの中で誰がいちばん偉いかを言い争っていたのです。そのときイエスが経験された悲しみは、どれほど大きかったでしょうか。イエスの従者を名乗る私たちも、弟子たちと同じ過ちを繰り返してはいないでしょうか。イエスの熱心な従者でありながら、誰がいちばん偉いかと互いにひじを張り合っては。

世の中でデュラセルの原則に支配されることよりも悪いことが、ただ一つあります。それは、教会の中でその原則に支配されることです。神が私たちを助け、この自己追求の原則から解き放ってくださいますように。そうして私たちが、神の王国の満ちあふれる喜びを経験できますように。

第 15 章　あなたはどう読むか

今日は特別な日になりそうです。これから開けるかもしれない可能性に、あなたは期待と興奮でいっぱいです。ある大手メーカーの社長が、あなたが手がけた特別な設計に関心を持ち、それを製造して世界中へ輸出することを真剣に検討しているのです。あなたたちは、地元の感じのよいレストランで昼食をともにすることにしました。会うのは初めてなので、あなたは自分の夢を現実に変えてくれるかもしれないその人を、緊張しながら見回して探します。ようやく彼が到着し、あなたは力強く握手を交わします。二人はレストランに入り、席につきます。打ち解けるために、食事の相手はあなたの家族のことや、住んでいる場所のこと、子どもたちの学校のことを尋ねます。

すべて順調です。ただ一つ、あなたのすぐ後ろに、スープをすする芸を極めたような男がいることを除いては。最初は聞き流していましたが、しばらくすると少し気になってきます。「作法というものを少しは覚えたほうがいい人もいるな」とあなたは内心思いますが、気を散らさないように聞き流します。将来の事業相手との会話は順調に進み、あなたの設計の付加的な利点について話しているちょうどそのとき、後ろの男が突然、テーブルの食器が鳴りそうなほど盛大なげっぷをしました。全員の視線が、まるで作法というものを知らないらしいこの珍しい人物に、一斉に注がれます。部屋は、くすくす笑いと押し殺した笑い声、そこに恐怖と嫌悪のまじった音で満たされます。ついに店主が出てきて、その男に出ていくよう求め、あなたのような方はうちの店には歓迎されません、と告げるのです。

本当に興味深いのは、同じ男が中国の文化を映したレストランに座っていたなら、誰一人まばたきさえしなかっただろう、ということです。それどころか、あなたがそうしたしぐさをしなければ、主人と女主人はがっかりしたかもしれません。また中国の文化では、初対面の人と握手をしようとしたり、食事の席で家族の話題を持ち出したりすれば、かなり無作法だと見なされたでしょう[55]。

まったく同じ行為が、どの文化から、どの世界観から来るかによって、まるで違うふうに受け取られる。驚くべきことです。この事実は、神の王国とサタンの王国という二つの異なる文化を見るときにも、変わりません。

キリスト教の信仰には一つの土台、イエス・キリストがあります。それなのに、イエスの名を名乗る無数の集団を見わたすと、一つの土台の上にこれほど多くの矛盾が存在しうることに、私たちは当惑します。神の王国への旅には、文化の移し替えと、世界観の移し替えとが伴います。前の章では、天の考え方を学ぼうとするときに私たちがしばしば直面する困難を述べました。

キリスト者の歩みにおける最大の困難は、神の言葉、すなわち聖書にどう向き合うかをめぐって生じます。私たちは、達成と地位の中で教育されてきた世から出てきました。けれども神の王国へ移っていくとき、自分の意見を明け渡し、神の言葉の読み方を神の霊に教えていただくことが、絶対に欠かせません。悲しいことに、そうならないことが多いのです。キリスト教の信仰と歴史に見られる数多くの矛盾と異端と争い

[55]http://www.chinawestexchange.com/Chinese/Culture/customs.htm

は、正当で親密な関係に焦点を置く天の枠組みではなく、デュラセルの枠組みで聖書を読むことから、直接に生じています。

イエスは、ルカによる福音書 10 章で、ある律法学者との対話の中でこの点を取り上げておられます。律法学者はイエスに尋ねます。「何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。イエスは答えられます。「律法にはなんと書いてあるか」。そして、より深い問題に入るために、こう問われるのです。「あなたはどう読むか」[56]。イエスは、あなたは何を読むか、とは尋ねておられません。あなたはどう読むか、つまり、読んだものをどう解釈するか、と問われているのです。これは、地上のデュラセルから天の関係への旅を望むすべての人にとって、鍵となる問いです。あなたはどう読むか。

律法学者がイエスに尋ねた永遠のいのちについての問いは、キリスト者の歩みで最も重要な問いの一つです。あなたが占める地位と、あなたが交わる人々とは、この世におけるあなたの価値を示す強い指標です。これとは対照的に、天の王国ではすべての人が神の子であり、尊敬と尊厳に値します。対話をたどっていくと、この律法学者が、後者ではなく前者によって聖書を解釈したがっていることに気づきます。彼はイエスに正しい答えを述べます。「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。また、自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」[57]。イエスは事実上こう言われます。「そのとおり。それを行いなさい。そうすれば命が得られる」。ところが、それが何を意味するかを完全に悟った律法学者は、「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」と尋ねることで、その意味をねじ曲げよう

[56]ルカによる福音書 10:25、26

[57]ルカによる福音書 10:27

とします。聖書の意味は単純です。けれどもデュラセルの影響下にある人間の心は、それが理解しにくいかのようにふるまいます。古いものを手放し、新しいものを全面的に受け入れることを望まないからです。ここに、生気のないキリスト者がこれほど多い理由があります。彼らはキリストの王国を信じながら、サタンの王国に従って生きているのです。その結果が、混乱と苛立ちと悪です。

救いという問題について、キリスト教の信仰全体が混乱しています。恵みによって力を与えられたキリスト者は十戒と調和して生きる、と聖書ははっきり教えているからです。ところが私たちの多くは、デュラセルの文脈で十戒に向き合います。十戒を、神とその子らとのあいだに必ず起こる、約束された関係の描写として見るのではなく、救いという目標を手に入れるために実行しようとするのです。

逆に、そしてもっと一般的なことですが、律法の要求を実行することの不可能さを見て取りながら、信仰の関係に入るかわりに、神の戒めを守ることは不可能だと宣言してしまう人々が、大勢います。そのため彼らは、キリストにある勝利の自由を決して味わいません。実行しようとするのであれ、実行しないでおこうとするのであれ、問題はやはり関係ではなく業績なのです。どちらの群れも、私たちのために死んでくださった方との信仰にもとづく関係の文脈で十戒を受け入れないかぎり、天の王国に入ることはありません。

業績に反対する立場を取り、キリスト者の歩みにおける勝利は不可能だとする一群のキリスト者にとっては、やがて、彼らが仕える神もまた何事もなしえない方となります。この傾向に、世的な承認欲求が加わると、神が文字どおりの六日間で世界を造られたという力を拒む、キリスト教の学者や教師や信者が現れるのも、驚くにあたりません。律法学者が、隣り人を愛せよという答えを述べておきながら「では、わたしの隣

り人とはだれのことですか」と問い返したのと同じように、今日多くの学者がこう言います。「はい、私たちは六日間の創造を信じます。けれども、それはどのような日なのでしょうか」。悪はつねに、自分に都合よく聖書をねじ曲げる道を探します。キリストを信じながら、この世に従って生きるという道です。悪霊たちもまたキリストを信じており、そしてこの世に従って生きているのです。

新しい心を造ることのできる神への信仰を失い、聖書の平明な言葉について巧妙な問いを立てることを学んでしまえば、あとは簡単です。聖書が私たちの前にはっきりと示している、家庭と教会における男と女の役割を拒むことと並んで、同性愛をキリスト者の標準として受け入れることも、たやすくなります。この考え方は、天の王国には異質なものです。価値はつねに関係によるのであって、地位によるのではありません。

力と地位と業績の原則に合うようにねじ曲げられ、ゆがめられてきた聖書の教えを、私たちはいくつも挙げることができるでしょう。けれども要点は十分に明らかになったと思います。もし私たちがイエスの従者であると告白するなら、私たちは聖書を、私たち全員がそこから出てきた王国の原則ではなく、この方の王国の原則に従って解釈しようとするはずです。

第 16 章　もはや僕ではなく

あれは特別なひとときでした。六歳の息子と私が、車で一緒に出かけていたときのことです。私たちは深く意味のある話をしていました。まあ、私の大切な息子の経験が許すかぎりの深さで、ということですが。彼の頭の中で歯車が着々と回っているのが見えました。何かかなり深遠なことを言おうとしているのを感じ取ったそのとき、それが出てきたのです。「あのねお父さん、ときどきお父さんがボスで、ときどき僕がボスだったら、もっとうまくいくと思うんだ」。「そうか、なかなか面白い提案だね」。私は咳払いをしながら答えました。しばらく沈黙が続きました。その提案のどこがおかしいのか、良い理由を考えようとしていたのです。思いつかなければ、二人とも困ったことになりそうでした。「うん、でもね、聖書はそういうふうにしなさいとは言っていないんだよ」。「じゃあどうして、お父さんはいつも僕にああしろこうしろって言うの」。「そうだね。イエス様が、お前をイエス様のために強い青年に育てなさいと、お父さんに頼まれたんだ。イエス様はお父さんのボスだから、お父さんは言われたとおりにしたほうがいいと思うんだよ」。

子育ては本当に学びの連続です。「食べているあいだは座っていなさい」。「えー、ずるい」。「ねえ、おもちゃを拾って片づけてちょうだい」。「もうお母さん、外で遊びたいのに」。「もう寝る時間だよ」。泣いて、ぐずって、わめいて、「でもお父さんは今寝ないじゃない。どうして僕だけ」。

規則と決まりばかり。これでは親はいつでも鬼のようです。なぜ子どもは、食卓で静かに座ってゆっくり食べてほしいのは、おなかをこわさないためだとわかってくれないのでしょうか。片づけを覚えてほしいの

は、大きくなったときに整理して効率よくやれるようになるためだと、なぜわかってくれないのでしょうか。たっぷり眠って病気にならないようにしてほしいのだと、なぜありがたく思ってくれないのでしょうか。なぜでしょう。それは、子どもが人生の落とし穴と危険を知らないからです。

使徒パウロは、この譬えを取り上げて、キリスト者としての私たちの旅を説明しています。

> わたしの言う意味は、こうである。相続人が子供である間は、全財産の持ち主でありながら、僕となんの差別もなく、
>
> ガラテヤ人への手紙 4:1

パウロは、子と親との関係を、僕と主人との関係と変わらないものとして描いています。父は息子を神の王国の原則の中へ訓練しなければなりません。けれどもデュラセルの性質を持つ息子には、この訓練すべての理由がわかりません。父が教える教えの多くは彼の性質に反しており、しばしば、僕でいるのと変わらないつらい仕事に思えます。少年はたやすくこう思うでしょう。「どうしてお父さんは、僕のやりたいことをこんなに邪魔するんだろう。まるで奴隷みたいだ。『あれをしろ、これをするな』。ずるいじゃないか」。

この状況は、神の王国へ入る備えをさせようと私たちを扱ってくださる神のなさり方を、見事に描き出しています。多くの人は神の求めを厳しく手厳しいものと見なし、しばしばこう問います。「なぜ神は、私にこんなことが起こるのを許されたのか」「なぜキリスト者の生活は、こんなに窮屈に思えるのか」。また、子どものままで僕でいることに満足しているように見える人々も、大勢教会に加わります。キリスト者の生活の務めを果たし、その努力に報いがあることを願っているのです。そ

うした人々は、放蕩息子の物語に出てくる兄の感情に飲み込まれる危険にさらされています。

パウロは、人生の多くの当惑と、神の扱いについての問いから、どうすれば解き放たれるかを説明しています。神が私たちの父であり、私たちを王国へ入れるために整えてくださっており、そして私たちを激しく愛しておられることを、本当に理解するとき、神との関係は意味を持ちはじめます。規則と決まりは、もはや楽しみを奪う制限や境界とは見えなくなります。かわりにそれは自由への扉となり、そこには私たちへの神の優しい配慮と、神の子としての相続財産を私たちが余すところなく受け取ることへの、切なる願いとが現れているのです。パウロはこう説明します。

> それと同じく、わたしたちも子供であった時には、いわゆるこの世のもろもろの霊力の下に、縛られていた者であった。(4) しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生れさせて、おつかわしになった。(5) それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。(6) このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。(7) したがって、あなたがたはもはや僕ではなく、子である。子である以上、また神による相続人である。
>
> ガラテヤ人への手紙 4:3-7

これは聖書の中でも最も美しい言葉の一つです。神の子とされるという私たちの立場を確保するためのイエスの犠牲を認めるとき、私たちはサタンの王国の奴隷状態から解き放たれます。私たちはデュラセルの圧政から自由になり、神の息子として、娘として、強く気高く立ちます。イエスのゆえに、自分がいつまでも神の愛する子でありつづけると知っ

ているからです。神の霊はあなたの心の中で「アバ、父よ」――「お父さん、お父さん」と叫んでくださったでしょうか。あなたは神の愛の中で安心し、その腕の中へ駆け込めるでしょうか。そして、自分がただ歓迎されているだけでなく、心から待ち望まれていると知っているでしょうか。父が近くにおられると顔が輝く、あの子どもらしい慕う心へ、あなたは帰ってきたでしょうか。この自由を経験するまで、あなたはいつまでも僕のままです。明日には解雇の通知を渡されるかもしれないという、不確かさとともに生きる僕です。

神の子として、私たちの相続財産は確かです。私たちは大胆に神のもとへ行き、願いを申し上げることができます。神が私たちにとって最善をご存じであると、確信して信頼できます。人生で私たちに起こることはすべて、神の王国の価値観をより深く理解するようにと私たちを育て、デュラセルの奴隷状態を打ち破るためのものなのです。

第 6 章で、人類をご自分の愛の抱擁へ連れ戻そうとされたときに神が直面された、信じがたい課題について話し合ったことを、覚えておられるでしょう。もう一度、その要点を挙げておきます。

- 人類に、自分たちの絶望的な状態を正しく認める知恵を与える手立て。そして、選択の自由を侵すことなく、正しい方向へ影響を与える道。
- 神の品性と王国について彼らが誤った見方をしていることを示し、神が本当に彼らを愛していることを、どうにかして示す道。
- 彼らの罪悪感と不安を取り除き、神の子としてのまことのアイデンティティと価値を回復する道。
- 彼らの目的の感覚、存在の理由、すなわち行く末を取り戻す道。

・以上のすべてに時間が必要でした。アダムとエバは自分のいのちを失っていたので、選び、決めるための時間を与える生命維持の仕組みが必要でした。

・これらすべてを行いながら、神は義を保たなければなりません。彼らの反逆を見過ごして「かまわない」と言うわけにはいきません。神はあわれみによって、選択の結果のすべてが彼らに降りかかることを許されませんでしたが、それでもアダムとエバは、自分たちのしたことの誤りに気づきはじめるために、自分の選択の結果を理解しなければならなかったのです。

イエスの地上の働きと、死と、復活とは、この六つの課題すべてに解決を備えました。キリストの十字架の力を、誰が理解できるでしょうか。それは、私たちの間違った行いを取り除くというだけのことよりも、はるかに深いのです。はるかに、はるかに深いのです。

今この場でひざまずき、十字架を見上げて、デュラセルからのあなたの解放を見てくださいませんか。あなたは神が慈しんでおられる愛する子だと告げる、天からの声が聞こえるでしょうか。あなたの罪責と、恨みと、高慢と、苦々しさとを、すべてこの方に降ろしてくださいませんか。この方の満ちあふれる喜びが、今この瞬間あなたの魂に流れ込むにまかせてください。まだそうしていないなら、あなたはそうすることができます。デュラセルから逃れる秘訣は、もはや僕ではなく、息子となり、娘となることなのです。

第 17 章　バビロンは倒れた

それは稲妻のように襲いました。ドイツの装甲師団がオランダとフランスの野を駆け抜け、一夜のうちに両国はナチスの戦争機構の鉄の拳に固く握りしめられました。占領下の国で生きることは、人をしなびさせる経験です。私の父は、オランダ北部のアッセンという町で、この時代を生き抜きました。

男たちはドイツの戦争機構に徴用されました。密告者はいつでも彼らを恐るべき秘密警察に通報する用意があり、いつ何時、戸口を叩かれ、愛する者が引きずられて二度と姿を見せなくなるかもしれません。ナチス政権は、デュラセルのあらゆる特徴を示していました。あらゆる競争相手を排除しようとする支配の霊、恐れによる統治、そして悪魔的な満足とともに力を誇示すること。

資源を奪われ、しぼり取られ、縛りつける鎖に疲れ果てて、オランダは 1944 年の冬に備えができていませんでした。家を離れることさえできませんでした。戻ってきたときには、薪にするために解体されて、家がなくなっているかもしれないからです。都市では、何千人もが飢えと寒さで亡くなりました。この悪夢は、いつまで続くのでしょうか。

ついにドイツ軍は退却しました。橋を爆破し、弾薬を破壊し、できるかぎりの破壊を残していきました。父は、誰もが街で踊り、連合軍の兵士たちが食糧を配っていたのを覚えています。終わったことが信じられないほどでした。ついに自由が来たのです。

カインの霊は今も生きています。そしてヨハネの黙示録は、キリストが帰って来られる直前に、この支配的で、不安で、ねたみ深く、値打ち

のない霊が、滅びる前に最後の力の誇示を行うことを明かしています。ヨハネはそれを、海から現れる七つの頭と十本の角を持つ獣として描いています。

> わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。それには角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があって、頭には神を汚す名がついていた。
>
> ヨハネの黙示録 13:1

この獣は、地上のすべての国々に対する大いなる力と権威を与えられ、全世界がこの獣の力を礼拝し、これに服従します[58]。この獣のような力は、天と地を造られた神との私たちの関係に、真っ向から対立します。そして礼拝を自分へ引き寄せようとするのです。

この獣が、これほどたやすく全世界を従わせられる理由は、それがデュラセルの電池で動いているからです。それは、私たちが皆生まれつき話している言葉を話します。自分の達成と業績によってアイデンティティを求めよと促し、自分の条件で神に会えと促します。自分の血を伴わないささげ物を持ち込み、神がそれに応じて自分の礼拝を受け入れるべきだと期待させるのです。世界の大部分はすでにこの獣の力の下にありながら、それに気づいていません。世界が自由の原則を拒み、恐れと力による世界規模の支配へ戻るとき、それはただ、私たち一人ひとりの心の奥にひそんでいるものが、外に現れたにすぎないのです。

神は手をこまぬいて何もしないでおられるわけではありません。神は、この獣のような力に屈しないようにと世界に警告する、必死の最終の使信を送られます。それは三つの使信の形を取ります。第一の使信は

---

[58]ヨハネの黙示録 13:2、7

人類を呼び覚まし、天と地を造られた神を礼拝すべきことを思い起こさせます。それは私たちをイエスの犠牲へ向けさせ、カインのささげ物が決して神に受け入れられないことを思い起こさせます。私たちは神の好意を決して勝ち取ることができません。私たちの救いは、小羊の血によって私たちのために買い取られたのですから[59]。

それから神は、きわめて大切な真理を思い起こさせてくださいます。神はそれを、こう表現されます。

> また、ほかの第二の御使が、続いてきて言った、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者」。
>
> ヨハネの黙示録 14:8

なぜ神はバビロンという言葉を使われるのでしょうか。聖書を見ていくと、バビロンの町を建てたのはニムロデだったことがわかります。ニムロデは興味深い人物でした。聖書は「彼の国は最初シナルの地にあるバベル、エレク、アカデ、カルネであった」と告げています[60]。ニムロデは、自分自身の王国を打ち立てた最初の人間として記録されています。またニムロデが、ある時点で自分の母と結婚したことに注目するのも興味深いことです。まさに機能不全の家庭です。母と結婚するために父を殺したという説さえあります。いずれにせよ、ニムロデの家庭は、家族関係が聖なるものとされる神の王国の原則の上には、築かれていませんでした。

---

[59]ヨハネの黙示録 14:6、7

[60]創世記 10:10

ニムロデの家庭生活には安心感がまったく欠けていました。そのため彼は、誰に属しているかではなく、何をするかによって知られるようになっていきました。創世記 10 章で、聖書は人類の系図を列挙しています。それぞれの人は、父が誰であるかによって特定されました。人が何者であるかは、家族の関係によって定まっていたのです。これが神の王国の営み方です。ところがニムロデは、力ある狩人、力ある支配者として知られるようになりました。

> 彼は主の前（に敵対して）力ある狩猟者であった。これから「主の前（に敵対して）力ある狩猟者ニムロデのごとし」ということわざが起った。(10) 彼の国は最初シナルの地にあるバベル、エレク、アカデ、カルネであった。(11) 彼はその地からアッスリヤに出て、ニネベ、レホボテイリ、カラ、(12) およびニネベとカラとの間にある大いなる町レセンを建てた。[61]
>
> 創世記 10:9-12

自分の不安に駆り立てられて、ニムロデは自分を証明する必要を感じました。そこで彼は町々を建てはじめ、次いで軍隊を編成して、近隣の家族の部族を征服しはじめます。ある鋭い歴史家は、次のように述べています。

> これまでの支配者の権威は、血のつながりという感覚の上に置かれており、族長の優位は親の統制を映したものであった。ところがニムロデは、これに反して、領土の支配者であった。そして人間は、その領土の住民であるかぎりにおいてのみ、彼の支配下にあったのであり、個人的なつながりとは無関係であった。それまでは、拡大

[61]訳注：「主の前に」と訳された語は「主に敵対して」とも読めます。著者はニムロデの反逆を強調するため、括弧を補ってこの読みを示しています。

された部族――家族――社会があった。今や、一つの国民、一つの政治的共同体――すなわち国家があった。[62]

今日、ほとんど全世界がニムロデの足跡をたどっています。今日の統治は政治的で領土的であり、部族的でも遊牧的でもありません。

この政治的な国家にもとづく仕組みを築くために、ニムロデがたどった段階に注目するのは興味深いことです。神はこの仕組みを、彼が最初に建てた町の名で呼んでおられます。バビロンです。バビロンが人の心の中でどのように育つのか、その本質に注目してください。

- それは、父から引き離された子どもたちの中に始まる。
- 次に、その結果として生じた不安のために、彼らは絶えず承認を求めるようになる。
- この承認への渇きが、しばしばそうした人々を、自分の空しさと無価値感を埋め合わせるための必死の手段へと駆り立てる。

これこそ、バビロンのぶどう酒をこれほど中毒性のあるものにしている、秘密の材料です。役立たずだという思いに、あるいは自分にはやり遂げる力があると他人に証明しようとする決意に、悩まされたことのない人が、どれだけいるでしょうか。神に喜ばれようとする自分の努力がまったくの失敗で、もう努力する意味はないと感じたことのない人が、どれだけいるでしょうか。職場で、学校で、あるいは教会で権力争いに巻き込まれ、自己防衛の手段として、あるいは自分の小さな王国を広げようとして、怒りに満ちた鋭い言葉を聞いたり口にしたりしたことのない人が、どれだけいるでしょうか。全世界がこの杯から飲んでいるので

[62]A.T Jones, Empires of the Bible, (Review and Herald Publishing, 1904) p 51.

はないでしょうか。もし私たちがそのようにふるまうなら、私たちは本当にバビロンの奴隷なのではないでしょうか。

では、バビロンが倒れるとは、どういう意味なのでしょうか。「倒れた、大いなるバビロンは倒れた」という句は、エレミヤ書 51:8 から直接来ており、その文脈はエレミヤ書 50 章と 51 章にあります。

エレミヤ書 50 章で、神はご自分の民を、迷い出て休み場を忘れてしまった失われた羊として描いておられます。神の民は文字どおりバビロンに捕らえられており、その多くが、自分のまことの家、自分の休み場を忘れてしまっているのです。

けれども神は、ご自分の子らを忘れておられません。神は次の美しい約束をしてくださいます。

> 万軍の主はこう言われる、イスラエルの民とユダの民は共にしえたげられている。彼らをとりこにした者はみな彼らを固く守って釈放することを拒む。(34) 彼らをあがなう者は強く、その名は万軍の主といわれる。彼は必ず彼らの訴えをただし、この地に安きを与えるが、バビロンに住む者には不安を与えられる。
>
> エレミヤ書 50:33、34

そして 51 章では、次のように読みます。

> バビロンのうちからのがれ出て、おのおのその命を救え。その罰にまきこまれて断ち滅ぼされてはならない。今は主があだを返される時だから、それに報復をされるのである。(7) バビロンは主の手のうちにある金の杯であって、すべての地を酔わせた。国々はその酒を飲んだので、国々は狂った。(8) バビロンはたちまち倒れて破れた。これがために嘆け。その傷のために乳香を取れ。あるいは、いえるかも知れない。(9) われわれはバビロンをいやそうとしたが、

これはいえなかった。われわれはこれを捨てて、おのおの自分の国に帰ろう。その罰が天に達し、雲にまで及んでいるからだ。(10) 主はわれわれの正しいことを明らかにされた。さあ、われわれはシオンで、われわれの神、主のみわざを告げ示そう。

エレミヤ書 51:6-10

この章の文脈では、神の民はバビロンに捕らえられています。彼らは迷い出てしまいました。けれども神は彼らを救い出そうとしておられます。彼らがそれに値するからではなく、彼らが神の子であるからです。

「バビロンは倒れた」という言葉は、さばきと断罪の宣言であると同時に、イスラエルへの自由の約束でもあります。バビロンがイスラエルを捕らえていたからです。

第二天使の使信に含まれるバビロンの陥落は、霊的イスラエルを、不安と無価値感と、私たちを罪へ駆り立てる支配の霊とから解き放ちます。私たちが愛する者において受け入れられていること、イエスの犠牲によって私たちが本当に神の子であることを認めるとき、私たちの不安と無価値感はすべて拭い去られ、私たちは神の子として自由に立つのです。

三天使の使信は、エリヤの使信とも呼ばれます。そしてこの使信の最後の部分にあたるマラキ書 4:6 が、「彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる」と告げているのは、偶然ではありません。言いかえれば、この使信の力が解き放たれるのは、私たちが本当に自分は神の子であると信じるときです。私たちのした何かによってではなく、ただイエスが私たちのためにしてくださったことによって、そうなのだと。

バビロンと、そのデュラセルの原則を捨ててください。もはや僕にとどまらず、「アバ、父よ」と叫び、あなたが神の愛する子であることを知ってください。キリストによって、私たちは自由なのです。

何百万という人が、今日も心の重さと闘っています。前を向く力はしだいに弱まり、多くの人が出口を探しています。

自分は何の役にも立たない――その思いは、「自分は何もできない」「誰にも好かれていない」という評価から生まれます。多くの自己啓発書は、その痛みに対して「自分を愛しなさい」「自分をいたわりなさい」「あなたは特別だと言い聞かせなさい」と勧めます。

けれども、この方法は、人間にとって本当に必要な祝福を、まったく素通りしてしまいます。親のような存在、尊敬する導き手が、あなたに向かって祝福の言葉を語る。「あなたは愛されている」と、心から尊敬する人の口から聞く。この経験に代わるものは、どこにもありません。

天の父は、その言葉を毎日あなたに告げたいと願っておられます。しかしサタンは、多くの人の目をくらませ、価値を別のところに探させ、御父の祝福の声に耳を閉ざさせてきたのです。

あなたは、わたしの愛する子である。